笛吹市文化財調査報告書　第１集

山梨県笛吹市

夜　長　遺　跡

笛吹市道八代５７号線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５
笛吹市教育委員会

序

笛吹市は、東八代郡下の石和町・御坂町・一宮町・八代町・境川村と東山梨郡下の春日居町の6町村が合併して平成16年10月12日に誕生した。この報告書は、合併前に八代町教育委員会が実施した町道57号線（現在の笛吹市道八代57号線）の建設工事に伴う夜長遺跡発掘調査の報告書である。

今回の発掘調査は、道路の建設用地が夜長遺跡内を通過することから試掘調査が行われ、竪穴住居跡らしい掘り込みが確認されたり、平安時代の遺物が出土した約600㎡の範囲を対象に、平成12年10月4日から約3ヶ月にわたって行われたものである。その結果、住居跡10軒、土坑5基、溝状遺構1条が検出され、遺物も整理箱にして10箱分が出土するなど多くの成果を得ることができた。

夜長遺跡の所在地は、笛吹市八代町米倉地内で、標高320m前後の浅川左岸の扇状地南西縁に位置している。周辺には大仏塚遺跡・花田遺跡・金山遺跡があり、大仏塚古墳も所在している。また、本遺跡の西側には米倉C条里制遺構として確認されている条里型地割が広がっている。しかし、これらの遺跡が所在する浅川左岸の扇状地南西縁の様相については不明な点が多く、今回の発掘調査が、当地域の歴史解明の一端になればと考えている。

おわりに、発掘調査から本書の刊行に至るまでご指導・ご協力をいただいた関係機関、先学の諸氏をはじめ、作業に携わっていただいた皆様に敬意を表します。

平成17年3月

笛吹市教育委員会

教育長　　芦　原　正　純

例　　言

1. 本書は平成12年度に行われた山梨県東八代郡八代町米倉地内に所在する夜長遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は町道57号線建設工事に先立ち行われた。
3. 発掘調査は八代町教育委員会が実施した。
4. 発掘調査は平成12年10月4日より、同年12月27日まで行った。
5. 本報告書の執筆・編集・写真撮影は小坂規恵が行った。
6. 本遺跡の発掘調査では空中写真撮影・調査区全体図作成の一部については（株）フジテクノに委託した。
7. 発掘調査から報告書作成に至るまで、次の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。
   猪股喜彦、岡野秀典、小渕忠秋、瀬田正明、野崎進、林部光、望月和幸、森原明廣
   山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター　（順不同・敬称略）
8. 本書における出土品および記録図面・写真等は笛吹市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査組織は次のとおりである。
   調査事務局　霜村純志（八代町教育委員会教育長）
   石原明雄（八代町教育委員会社会教育課課長）～平成13年3月31日
   宮澤和道（八代町教育委員会社会教育課課長）平成13年4月1日～平成14年3月31日
   河野　修（八代町教育委員会社会教育課課長）平成14年4月1日～平成16年10月11日
   伊藤修二（八代町教育委員会社会教育課文化財係係長）
   調査担当者　小坂規恵（八代町教育委員会社会教育課埋蔵文化財主任調査員）
   発掘調査・室内整理参加者
   石倉弘子・梶原幸子・河西久美子・斉木愛子・斉間千津子・高野眞寿美・中込けん三・中込　榊・中山拓生・藤原さつき・村松久美子・矢野美鈴・渡辺あけみ
10. 山梨県東八代郡八代町は平成16年10月12日に周辺の町村との合併により笛吹市となった。本書の原稿は合併直前に仕上がったため、印刷製本は笛吹市となってから行われた。このことから、出版は笛吹市教育委員会となっているが、内容は東八代郡八代町のものとなっている。

凡　　例

1. 遺構の挿図中の斑点は焼土跡をあらわす。
2. 遺物の挿図中断面が黒塗りは須恵器、斑点は灰釉・緑釉陶器で、それ以外の土器類は白抜きである。また、土師器器面の斑点は黒色処理面をあらわす。
3. 表の大きさの（　）は現存値、［　］は推定値をあらわす。

目　　次

序文、例言・凡例、目次、挿図目次、図版目次

第Ⅰ章　　調査の経緯と概要……1
第Ⅱ章　　遺跡の位置と環境
　第１節　位置と地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……3
第Ⅲ章　　調査の方法と層序……6
第Ⅳ章　　遺構と遺物
　第１節　縄文時代の遺構
　　1　土坑……8
　第２節　平安時代の遺構
　　1　竪穴住居跡……8
　　2　土坑　……24
　第３節　時期不明の遺構
　　1　土坑　……25
　　2　溝状遺構　……25
　第４節　遺構外出土遺物　……26
第Ⅴ章　　まとめ　……31

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図 ……1
第 2 図　試掘トレンチ設定図 ……2
第 3 図　調査範囲図 ……3
第 4 図　周辺遺跡分布図 ……4
第 5 図　グリット設定図 ……6
第 6 図　調査区全体図 ……7
第 7 図　2号土坑 ……8
第 8 図　2号土坑出土遺物 ……8
第 9 図　2・3号住居跡 ……8
第 10 図　2号住居跡出土遺物 ……9
第 11 図　3号住居跡出土遺物 ……9
第 12 図　4号住居跡 ……9
第 13 図　4号住居跡出土遺物 ……9
第 14 図　5号住居跡 ……10
第 15 図　5号住居跡出土遺物（1）…10
第 16 図　5号住居跡出土遺物（2）…11
第 17 図　6号住居跡 ……11
第 18 図　6号住居跡出土遺物 …12
第 19 図　7号住居跡 ……12
第 20 図　7号住居跡出土遺物（1）…13
第 21 図　7号住居跡出土遺物（2）…14
第 22 図　8号住居跡 ……14
第 23 図　8号住居跡出土遺物 …15
第 24 図　10号住居跡 ……15
第 25 図　10号住居跡出土遺物 …16
第 26 図　11号住居跡 ……17
第 27 図　11号住居跡出土遺物 …17
第 28 図　13号住居跡 ……18
第 29 図　13号住居跡出土遺物 …18
第 30 図　土坑（平安時代）……24
第 31 図　土坑出土遺物（平安時代）…24
第 32 図　土坑（時期不明）……25
第 33 図　1号溝状遺構 ……26
第 34 図　遺構外出土遺物（1）…26
第 35 図　遺構外出土遺物（2）…27
第 36 図　遺構外出土遺物（3）…28

図版目次

図版1　遺跡全景（南より）
調査区全景
3号住居跡
4号住居跡
図版2　5号住居跡
5号住居跡カマド（1）
5号住居跡カマド（2）
6号住居跡
6号住居跡カマド
7号住居跡
7号住居跡カマド
7号住居跡カマド断面
図版3　7号住居跡遺物出土状態（1）
7号住居跡遺物出土状態（2）
8号住居跡
8号住居跡カマド
10号住居跡
10号住居跡遺物出土状態
11号住居跡
11号住居跡カマド
図版4　13号住居跡
13号住居跡カマド
13号住居跡遺物出土状態
1号土坑
3号土坑
4号土坑
1号溝状遺構
調査風景
図版5　平安時代出土遺物（1）
図版6　平安時代出土遺物（2）
図版7　平安時代出土遺物（3）

表目次

第1表　2号住居跡遺物観察表… 19
第2表　3号住居跡遺物観察表… 19
第3表　4号住居跡遺物観察表… 19
第4表　5号住居跡遺物観察表… 19
第5表　6号住居跡遺物観察表… 20
第6表　7号住居跡遺物観察表… 20
第7表　8号住居跡遺物観察表… 22
第8表　10号住居跡遺物観察表… 22
第9表　11号住居跡遺物観察表… 23
第10表　13号住居跡遺物観察表… 23
第11表　土坑一覧表（平安時代）… 25
第12表　1号土坑遺物観察表… 25
第13表　4号土坑遺物観察表… 25
第14表　土坑一覧表（時期不明）… 25
第15表　遺構外出土遺物観察表（縄文時代）…… 28
第16表　遺構外出土遺物観察表（平安時代）…… 29
第17表　遺構外出土遺物観察表（中世）…… 30
第18表　遺構外出土遺物観察表（鉄製品）…… 31

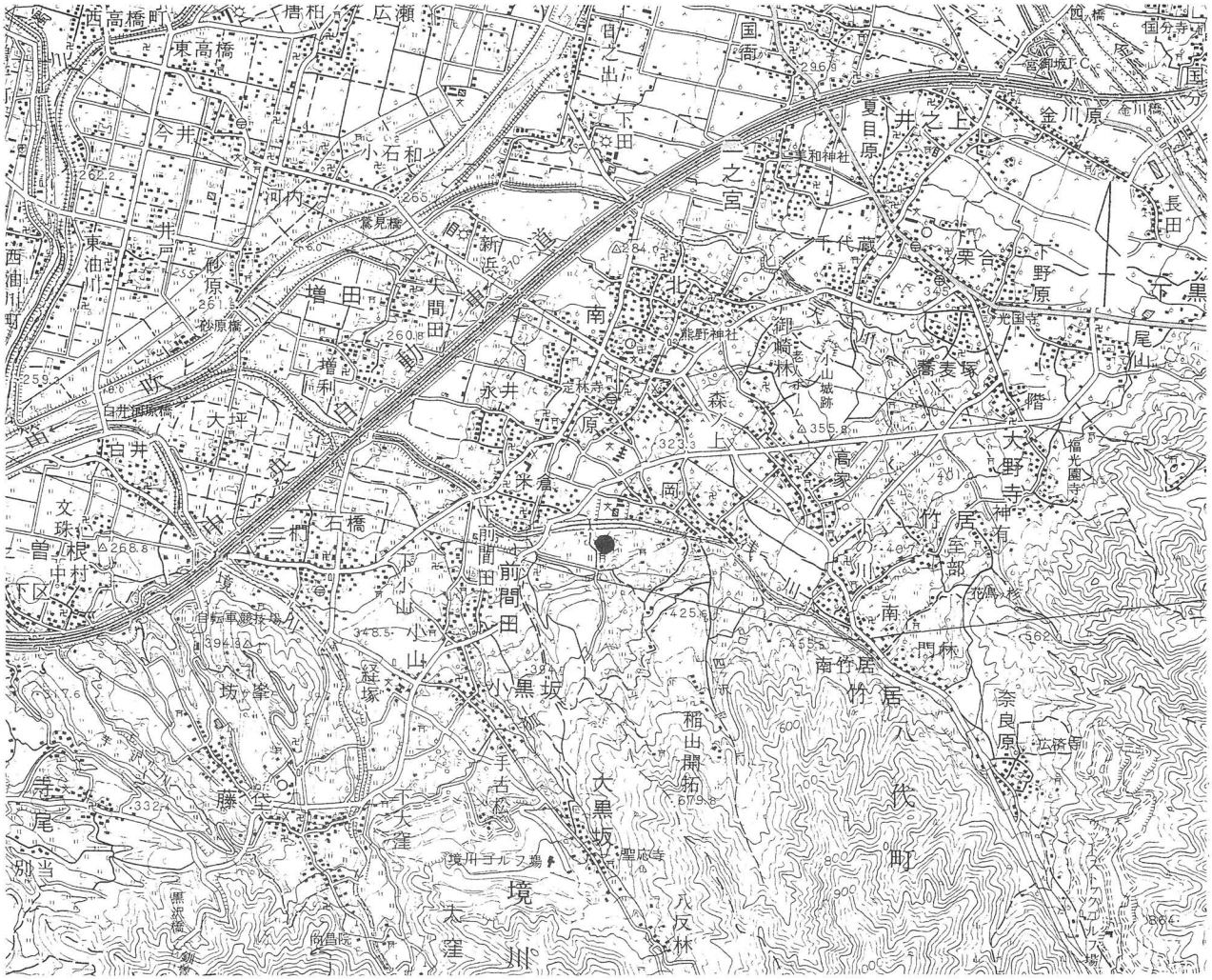
第Ⅰ章　調査の経緯と概要

八代町は昔から遺跡が多いところとして知られており、平成元年に行われた分布調査でも216の遺跡が確認されている。そのため、近年さまざまな開発工事に伴う遺跡の発掘調査が行われている。

今回の発掘調査は事業主体者である八代町が米倉地内において、町道57号線の建設工事を計画し、町教育委員会に埋蔵文化財の有無について所在の照会を行ってきた。町教育委員会では遺跡地図との照合を行った結果、周知の埋蔵文化財包蔵地『夜長遺跡』内に位置しており、現地踏査でも平安時代を中心とした遺物の散布が認められた。そのため、文化庁および山梨県から補助金を受け、計画予定地内の埋蔵文化財の有無を確認するために、平成12年7月27日から8月18日までの13日間かけ試掘調査を実施した。

その結果、住居跡らしい遺構の掘り込みや平安時代の遺物などが出土したことから、計画予定地内における埋蔵文化財の存在が明らかとなった。山梨県教育委員会学術文化財課・八代町とで協議を行い、道路建設予定地内のうち遺構が確認された約600㎡を対象に記録保存のための発掘調査を行うことにした。

平成12年10月4日から12月27日までの約3ヶ月間にわたり発掘調査を実施した。これにより、平安時代の住居跡10軒、土坑5基、溝1条が検出された。その後、引き続き遺物などの整理作業を行い、平成17年3月に報告書を刊行するに至る。



第1図　遺跡位置図（S＝1：50,000）

第２図　試掘トレンチ設定図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

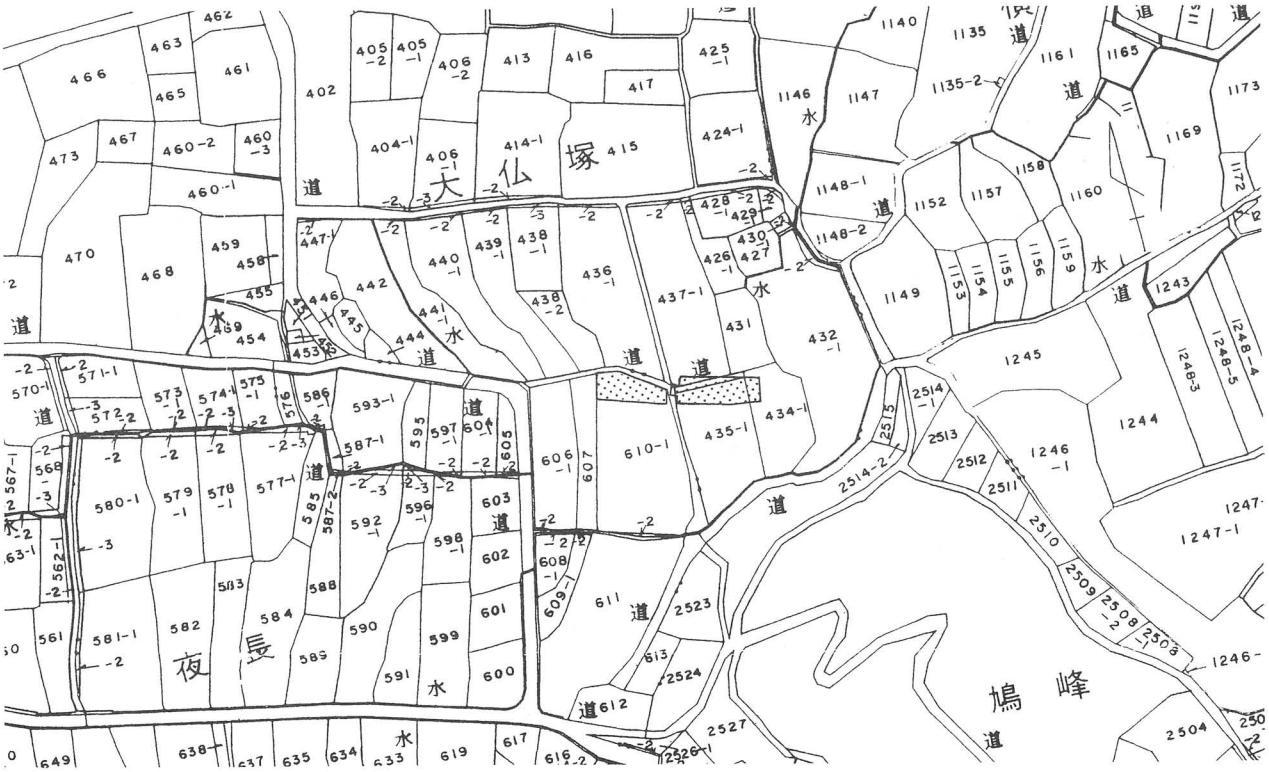
第１節　位置と地理的環境

山梨県東八代郡八代町は甲府盆地の南東部に位置しており、北は笛吹川をはさんで石和町があり、東には天川および花鳥山から矢高山の稜線を境にして御坂町がある。南には鳥坂峠を境にして芦川村、西は浅川下流とその支流である竜安寺川および大谷山から稲山の稜線を境にして境川村にそれぞれ隣接している。

町の総面積は 25.33 ㎢あり、浅川によって形成された扇状地上に発達した町である。浅川は御坂山塊中央部の大口山にその源流をもち、甲府盆地にむかって北西ないし西北西に流れて笛吹川にそそぐ、全長約 12 ㎞ほどの川である。かつては洪水のたびに流路を変えていたが、現在では扇状地の西側を流れている。

地形的には御坂山塊北斜面の山地と丘陵、崖錐地域、浅川の扇状地、笛吹川の沖積地から成り立っている。山地は標高 500 ～ 1400m の地帯で、町の約半分をしめ、主に南東部に広がっている。丘陵は浅川右岸には奈良原の東側から花鳥山にかけて標高 500 ～ 560 mの狭い範囲に広がり、左岸には上ノ原・上ノ平にかけて標高 380 ～ 440m のなだらかで広い丘陵がみられ、これらは西方にのび曽根丘陵に連なっている。

本遺跡が立地する浅川扇状地は御坂町の金川扇状地とともに甲府盆地に開く扇状地群の中でも最も発達したものの一つである。この扇状地は山地から丘陵に移る本町竹居門林付近を扇頂として、甲府盆地のある北西方向にむかって約 70 度に開く扇型をしている。面積は約 8 ㎢ほどで、町のほぼ 1/3 を占める。傾斜は平均２～３度あり、その扇端は北・南・永井・米倉地域の北西側に小さな急斜面の状態を残している。また、この扇状地には浅川の流路の変化に伴い、さらに細かく何段階も形成された状態がみられる。



第３図　調査範囲図（S＝１：2,500）

沖積地は新浜・大間田・増田付近の低湿地地帯で、かつては笛吹川の氾濫原であった地域である。標高は 255 ～ 280 mで、笛吹川の河床とほぼ同じ高さである。氾濫により流された遺跡も多く、現状では確認できていないものもあるが、かつては扇状地と同じく多数の遺跡が分布していたものと思われる。

夜長遺跡は八代町米倉地内に所在し、浅川の左岸の扇状地南西縁に位置する。調査区西端から約 150 m北には東⇒西方向に浅川が流れ、その対岸に浅川中学校がある。東端約 250m 東には八幡神社がある。南西側にある上ノ平丘陵と南東側にある上ノ原丘陵の谷間を大谷沢川が流れ、150 m南にはその灌漑用の溜池があり、それに隣接するように中尾神社の祠が奉られている。西へ約 300 mには竜安寺があり、さらに 200m ほど行くと境川村前間田に至る。やや傾斜面上にあり、標高は 320 m前後である。遺跡は東西約 100 m、南北約 120 mの範囲に広がり、今回調査したのはそのなかの東側部分にあたる。

第２節　歴史的環境

八代町内には先の遺跡分布調査において、216 の遺跡の存在が確認された。これらは山地を除く町内のほぼ全域に広がっており、時期的に分布の粗密がみられるが、旧石器時代から近世と多岐にわたり、中でも縄文時代前期～平安時代の遺跡が多く、主に丘陵や浅川扇状地上に集中して分布している。このことは古くから生活場所として利用されていたことを示している。

本遺跡の周辺にも遺跡が多く存在している。遺跡の位置する浅川左岸には八幡遺跡（117）、大仏塚遺跡（119）・花田遺跡（120）・金山遺跡（121）などがある。古墳では遺跡の東隣に大仏塚古墳（190）、八幡遺跡内にある鳩峰古墳（191）などが点在している。また、遺跡西側に一部かかるように米倉Ｃ条里制遺構があったことが確認されている。その北側の浅川右岸には町屋遺跡（33）・今宮遺跡（34）・天神原遺跡（35）・土井原遺跡（84）・沢添遺跡（85）などがある。また、町屋遺跡の南西部に近世の米倉氏館跡（207）があったとされ、天神原遺跡と土井原遺跡にかけては中世の米倉氏館跡（208）があったといわ

1	屋敷ノ内	26	安事田	51	大庭	76	東小山A	101	前田						
2	塚越	27	長沢	52	和泉	77	東小山B	102	梨木						
3	神ノ木	28	横田	53	竹之内	78	東小山C	103	中原						
4	東鎌田	29	下長崎	54	奴白	79	宮ノ後	104	蝙蝠塚						
5	欠ノ畑	30	豊気	55	森ノ上南	80	中丸	105	南原						
6	一町五反	31	南居	56	山ノ神	81	横堰	106	久保畑						
7	沢又木	32	米倉・向田	57	森ノ上北	82	高家・御崎	107	柚木	137	八幡さん古墳				
8	角田	33	町屋	58	宮川	83	塚田	108	竹居・御崎	138	弁財天塚古墳				
9	壱町田	34	今宮	59	八王子	84	土井原	109	土原	139	狐塚古墳				
10	上反田	35	天神原	60	伊勢之宮	85	沢添	110	花鳥山	140	樹塚(荘塚)古墳	160	猿子塚古墳	194	富士塚古墳
11	穴田	36	宮之後	61	上小下	86	北割	111	深沢道上	142	物見塚古墳	164	石塚古墳	195	盃塚古墳
12	柳田	37	長慶寺	62	久保A	87	岡・村上	112	切付平	143	鎧塚古墳	165	蝙蝠塚古墳	196	銚子塚古墳
13	泉田	38	下原	63	下神之木	88	南・村上	113	欠沢	144	能成寺塚古墳	168	芋塚古墳	200	屋敷ノ内
14	雁甲B	39	向原	64	上神之木	89	浅見原	114	大覚林	145	信守塚古墳	174	蝙蝠塚第一号墳	201	武田信守館跡
15	宮田	40	根岸	65	金地蔵	90	大久保	115	稲山原	147	伊勢塚古墳	175	蝙蝠塚古墳	202	能成寺跡
16	雁甲A	41	扇田	66	御崎林	91	清水	116	銚子原	148	団栗塚古墳	176	狐塚古墳	203	奴白屋敷跡
17	渋田	42	弁戈天	67	堀川	92	田中畑	117	八幡	149	真根子塚古墳	182	おこり塚古墳	204	飯田氏屋敷跡
18	芦川田	43	長崎	68	久保B	93	早稲田	★118	夜長	151	双子塚古墳	184	こおり塚古墳	205	下新兵衛屋敷跡
19	身洗澤	44	五里原	69	下小下	94	法花田	119	大仏塚	152	雌蝶塚古墳	185	御崎古墳	206	浪人屋敷跡
20	鶴辺	45	真道澤	70	芝草	95	八反田A	120	花田	153	雄蝶塚古墳	186	御崎二号墳	207	米倉氏館跡
21	三原沢	46	侭ノ下	71	大橋	96	八反田B	121	金山	155	大塚古墳	189	八幡塚古墳	208	米倉氏館跡
22	北・向田	47	神田	72	川後塚	97	一町田	122	竜安寺川西	156	古柳塚古墳	190	大仏塚古墳	209	小山城址
23	福田	48	原	73	絵毛	98	梅ノ木田	123	上ノ平A	157	地蔵塚古墳	191	鳩峰古墳	210	高家三郎屋敷跡
24	下長沢	49	二子塚	74	綿熨斗	99	青木田	124	上ノ平B	158	山神塚古墳	193	竜塚古墳	＊	瑜伽寺
25	馬見塚	50	堀ノ内	75	丸山	100	後藤	125	大谷沢A	159	馬見塚古墳	＊	スクリーントーン部分は条里制遺構の範囲		

第４図　周辺遺跡分布図（S＝１：25,000）

れている。古墳では米倉氏館跡（207）内に雌蝶塚古墳（152）や雄蝶塚古墳（153）があり、米倉氏館跡（208）内には無名古墳（162）、無名古墳（163）、石塚古墳（164）がある。また、550 mほど北東に蝙蝠塚古墳（165）、無名古墳（166）、無名古墳（167）などが点在している。

本遺跡の南側には丘陵地帯が広がり、浅川へとそそぐ川によってその間が開析されている。東の四ッ沢川と西の大谷沢川とに挟まれた丘陵上には銚子原遺跡（116）・稲山遺跡（115）があり、そこに盃塚古墳（195）、銚子塚古墳（196）、無名古墳（197）などが点在している。また、その東隣に大谷沢川と西の竜安寺川に挟まれた丘陵上には上ノ平Ａ遺跡（123）があり、竜塚古墳（193）も分布している。

本遺跡からは平安時代の住居跡が確認されたが、町内にも同時代の遺跡が数多く存在し、扇状地上には全域に広がっている。同時期の遺構が確認された遺跡としては下長崎遺跡（29）・五里原遺跡（44）・堀ノ内遺跡（50）・八王子遺跡（59）・金地蔵遺跡（65）・堀川遺跡（67）・四反田遺跡・東小山Ｂ遺跡（77）・東小山Ｃ遺跡（78）・上ノ平Ａ遺跡（123）などがある。

下長崎遺跡では1986年に「三光神遺跡」として約400 ㎡を調査し、そこから古墳時代のものとされる条里制地割りの道１条、時期不明の配石遺構などが検出されている。遺物は縄文土器（主に前期後葉・中期初頭～中葉）、石器、弥生土器・古墳時代前期・中期・後期の遺物などがあり、中でも５世紀後半のものが最も多く出土している。1987年には県教育委員会で約560 ㎡を調査し、そこから古墳時代後期の住居跡３軒・掘立柱建物跡２棟・配石遺構２基・土坑４基、集石列１基、鍛冶遺構１基、奈良時代の住居跡３軒、平安時代の住居跡４軒、円形配石１基、列石６基、溝１条、集石13基、カマド４ヶ所などの遺構が確認された。2002年には町教育委員会により、農道整備拡幅工事のため約350 ㎡が調査され、縄文時代の溝状遺構１条、古墳時代後期の住居跡４軒、土坑２基、奈良時代の住居跡１軒、平安時代の住居跡13軒、土坑４基、溝状遺構１条が確認されている。

五里原遺跡では1983年には農道拡幅調査に伴い52 ㎡の面積に13本の試掘溝をいれる調査を行い、古墳時代後期の住居跡１軒とカマドの跡とされる焼土跡が２基、時期不明の配石と溝状遺構などが検出されている。各期の土器のほかに円筒土器２・手捏土器・鞴の羽口（古墳時代後期）・２片が融着した須恵器片などが出土している。1996年には試掘調査で住居跡らしき落ち込みが３箇所と確認され、古墳時代前期・後期の土器や平安時代の土師器坏・甕・柱状高台坏、灰釉陶器などの遺物が出土している。2001年には県道の歩道拡幅工事に伴い約270 ㎡が調査され、古墳時代前期の住居跡１軒、中期の住居跡４軒、後期の住居跡６軒、古墳時代の土坑２基、平安時代の住居跡１軒が確認されている。

堀ノ内遺跡では1988年に町教育委員会により町役場庁舎建設に際して面積1477 ㎡の調査が行われ、縄文時代中期の埋甕１基、古墳時代後期の住居跡16軒・奈良時代の住居跡７軒・平安時代の住居跡13軒、中近世の掘立柱建物跡１棟のほかに各時期に土坑・溝状遺構・ピットなどが確認されている。

八王子遺跡では1991年にスポーツ館建設に伴い調査が行われ、古墳時代後期の住居跡が３軒、奈良時代の住居跡３軒、平安時代の竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡１棟のほかに各期の土坑・溝状遺構が検出されている。また、遺物としては鉄製の犂先なども出土している。

金地蔵遺跡では2001年に住宅建設工事に伴い約300 ㎡の調査が行われ、縄文時代の落し穴状の土坑１基、古墳時代前期の住居跡１軒・土坑３基・奈良時代の住居跡１軒、平安時代の住居跡６軒・土坑３基・溝状遺構３条が確認されている。

堀川遺跡では1997年に建売分譲住宅建設に伴い約206 ㎡の調査が行われ、奈良時代末の竪穴状遺構１軒、溝状遺構１条、平安時代初の住居跡２軒、平安時代末～中世の竪穴状遺構３軒が確認されている。

四反田遺跡・東小山Ｂ遺跡・東小山Ｃ遺跡では1999～2000年の一連の農道建設に伴う約2640 ㎡の調査が行われ、四反田遺跡では平安時代の住居跡４軒と弥生時代後期の土器・灰釉陶器・中世のかわらけや磁器などが確認されている。東小山Ｂ遺跡では縄文時代の土坑３基、奈良時代の住居跡３軒・土坑１基・溝状遺構１条、平安時代の住居跡３軒・土坑２基・溝状遺構３条、時期不明の大型掘建柱建物跡や多数のピット群が確認されている。また、東小山Ｃ遺跡では平安時代の溝状遺構２条が検出された。

上ノ平A遺跡では1984年に縄文時代中期の住居跡3軒、弥生時代後期の住居跡7軒、平安時代の可能性がある12基の土坑など他に各時期に土坑・溝状遺構・ピットなどが確認されている。

今回本遺跡からは主に平安時代を中心とした集落跡が確認され、その周辺に大集落が存在していた可能性が十分考えられる。また、本遺跡に一部かかるように北側にひろがるとされる条里制遺構との関係も生産遺構との関連からみると興味深い。しかし、現状では各時期ともに不明な点も多く、さらなる詳細については今後も調査が進んでいくことにより徐々に明らかとなるであろう。

Ⅲ章　調査の方法と層位

今回の発掘調査範囲は町道57号線建設工事に伴う幅約10m長さ約60mの道路部分で、面積は約600㎡に及ぶ。試掘トレンチを全部で12本いれて調査を行い、そのうち10号トレンチから住居跡らしきカマドの状態が確認されたため、建設予定範囲の一部について調査を行った。

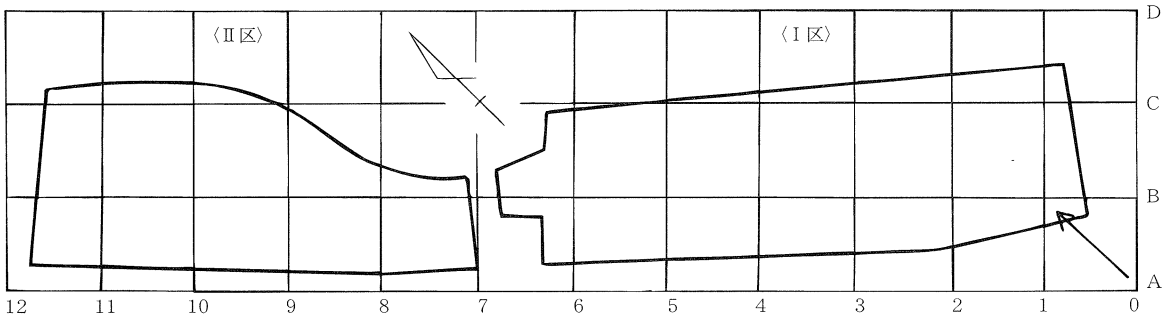
調査対象域はもともと畑の整地に伴い3段のヒナ段に分かれていたため、便宜的に上段をⅠ区、中段をⅡ区として調査を行った。本遺跡は畑を造成する際、傾斜面各段の上部の土を削って下に積むことにより平坦面を構成していたと思われる。そのため、Ⅰ区では0～3ライン、Ⅱ区では7～9ラインにかけて遺構の確認面が耕作土直下にあるか、または削平されており、13号住居跡のように壁高がほとんどないものや、遺物が多く出土しているが、遺構の確認が難しい状態のものなどがみられた。

調査区には5m四方に杭をうちグリットを設定した。グリット番号は長さに対してはⅠ区の最南東端を起点に北西方向にむかって1から12までの算用数字で示し、幅に対してはA～Cのアルファベットを付し、Bラインを基本ラインとしている。

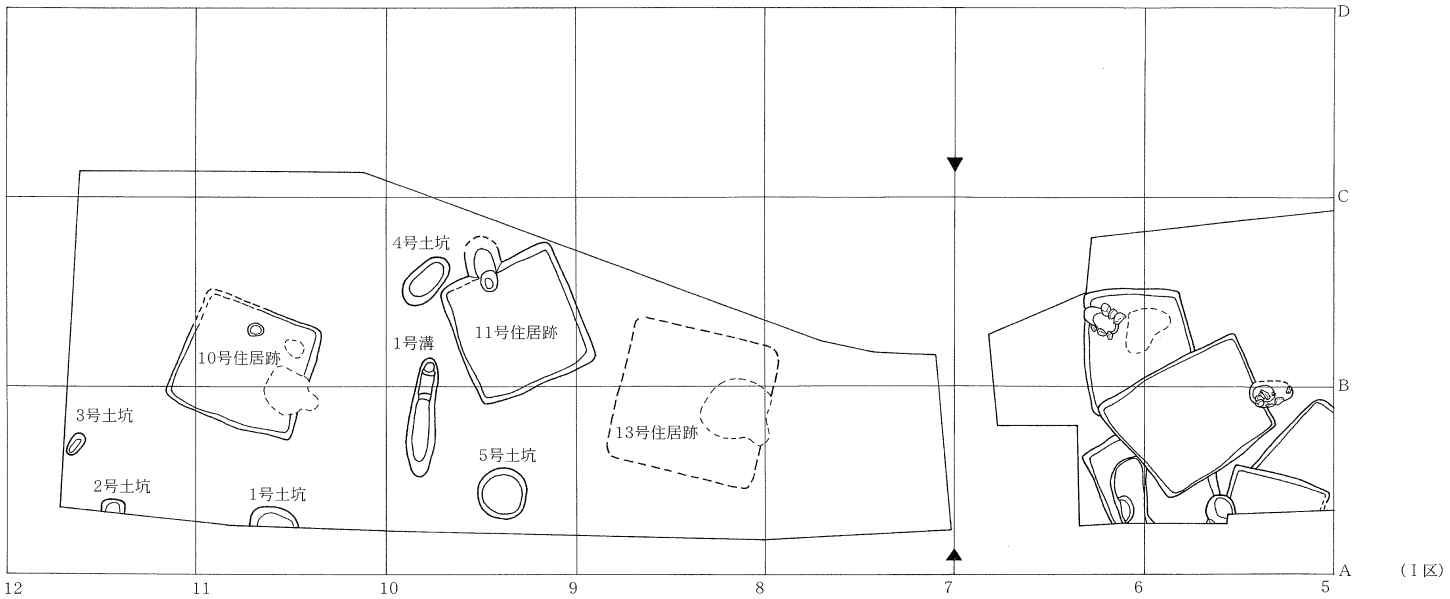
調査の方法としては、重機により表土層を廃土した後、遺構確認面を人力で精査して遺構の検出作業を行い、その後、各遺構の調査を行った。

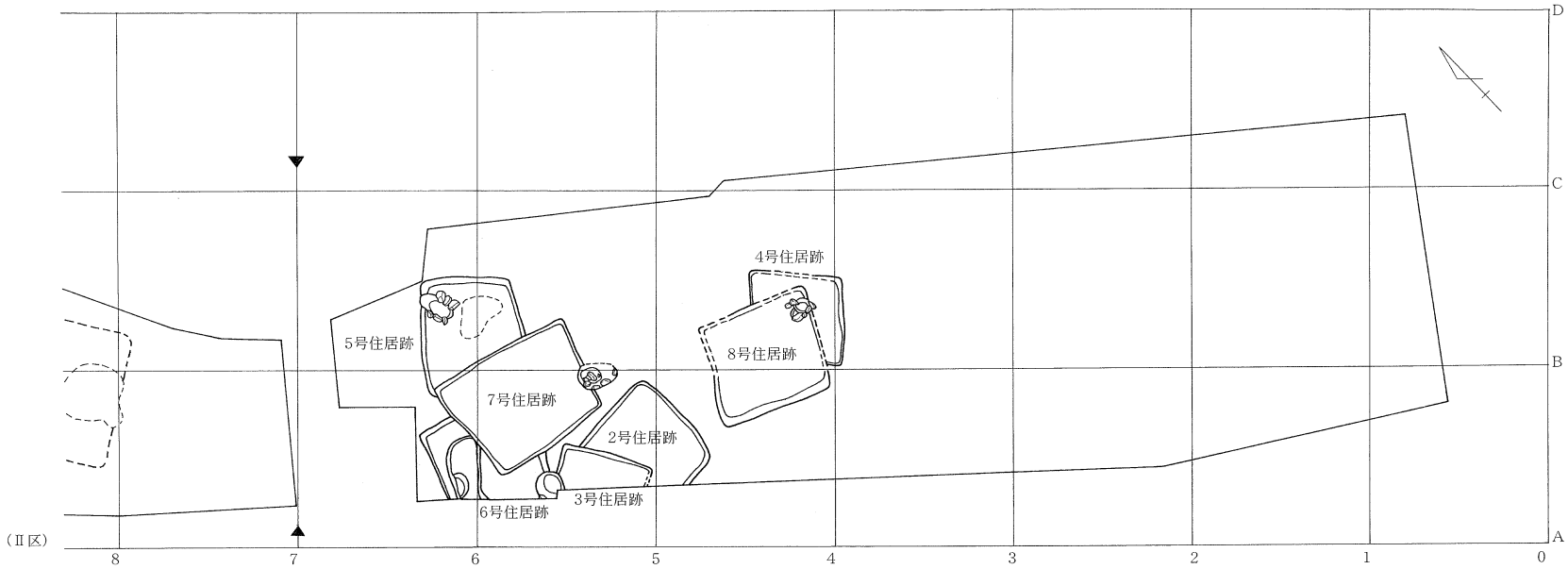
本遺跡の基本層序は次に示す通りである。遺構確認面はⅢ層である。

Ⅰ層	表土層（耕作土）
Ⅱa・Ⅱb層	茶褐色土（炭・赤色スコリアを少量含む）
Ⅲa層	茶褐色土（炭・赤色スコリアを多量に含み、白色粒子を少量含む）
Ⅲb層	茶褐色土（炭・赤色スコリアを微量に含む）
Ⅳ層	明茶褐色土（炭・赤色スコリアを少量含む）
Ⅴ層	黒褐色土（赤色スコリアを微量に含む）



第5図　グリット設定図（S＝1：400）





第６図　調査区全体図（S＝１：200）

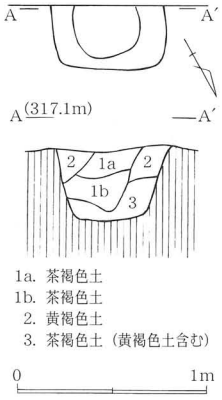
第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構

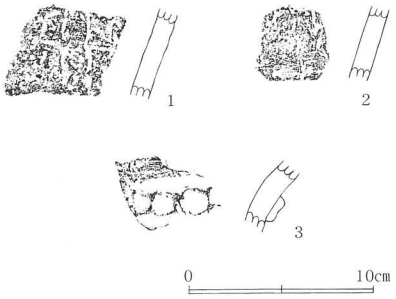
1. 土坑

２号土坑（第７・８図）

Ａ－12グリットに位置し、南側が一部調査区外にあるため確認されていない。平面形は方形を呈すると思われ、規模は東西60㎝、南北が現状で約35㎝、深さ35㎝を測る。覆土はいずれも茶褐色土を主体とし、覆土中から縄文時代前期の土器が数点出土しており、他の時期の遺物が確認されていないことから、当時期に属するものと思われるが、詳細は不明である。



第７図　2号土坑



第８図　2号土坑出土遺物

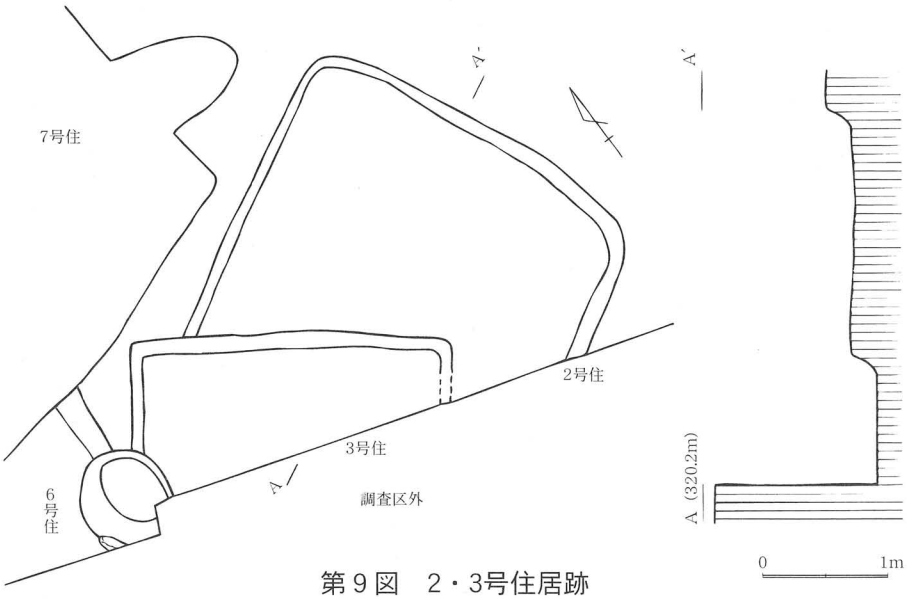
第２節　平安時代の遺構

1. 竪穴住居跡

２号住居跡（第９・10図、図版５、第１表）

本住居跡はＡ－５～６グリットにかけて位置している。西側を３号住居跡に切られており、南側1/4が調査区外にかかった状態で確認された。

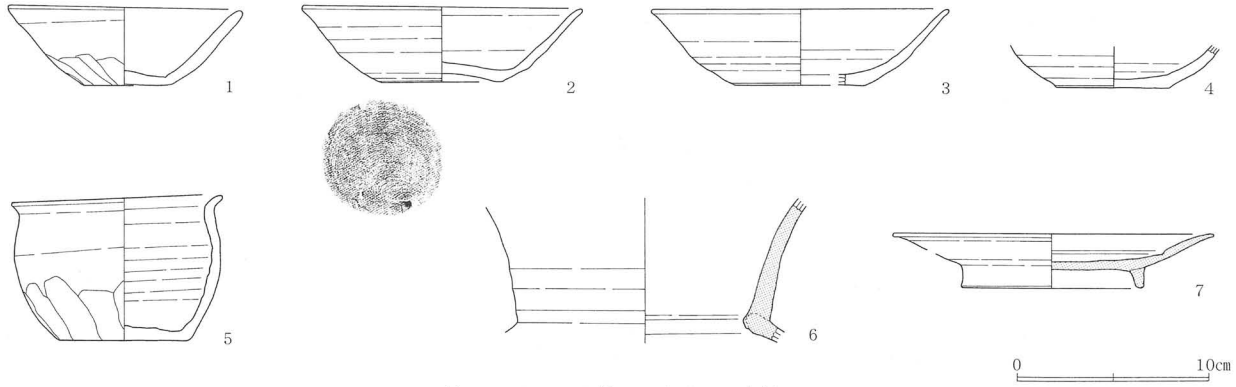
平面形は長方形を呈し、規模は南北3.0ｍ、東西は現状2.5ｍある。壁は垂直に最大で25㎝ほど掘り込まれている。床はおおむね平坦な地山で、硬化した面はみられないが、比較的しっかりした状態である。カマドは確認されておらず、調査区外または３号住居跡に切られた可能性が考えられる。



第９図　2・3号住居跡

遺物の出土状況は南東部から土師器坏（１）と緑釉陶器の段皿（７）が、北壁中央から坏（２）がそれぞれ床面から出土している。

遺物は土師器坏（１～４）・小型甕（５）・灰釉陶器の長頸壺（６）、緑釉陶器の段皿（７）が出土している。緑釉陶器の段皿は漬け掛けによる全面施釉で、高台断面が台形を呈する。



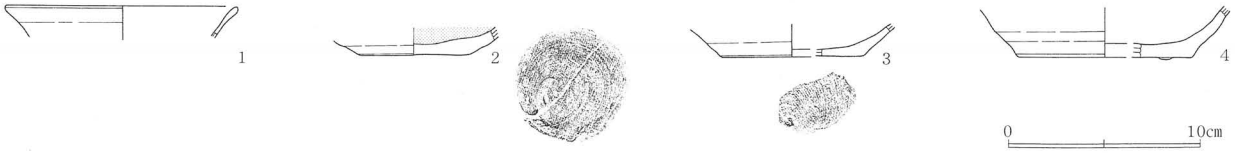
第10図　2号住居跡出土遺物

3号住居跡（第9・11図、図版1、第2表）

本住居跡はA－6グリットに位置している。東側の2号住居跡と西側の6号住居跡を切ってつくられている。南側が調査区外にのびているため、全体の1/3しか確認できなかった。

平面形は方形を呈すると思われ、規模は東西2.8 m、南北は現状で1.3 mある。壁は垂直に最大で35 cmほど掘り込まれている。床は地山で少し南にむかって傾斜しており、全体に軟弱で硬化した面は確認できなかった。カマドなどは検出されておらず、調査区外にある可能性が高い。

遺物はいずれも覆土中から土師器坏（1～3）・鉢（4）などが出土している。



第11図　3号住居跡出土遺物

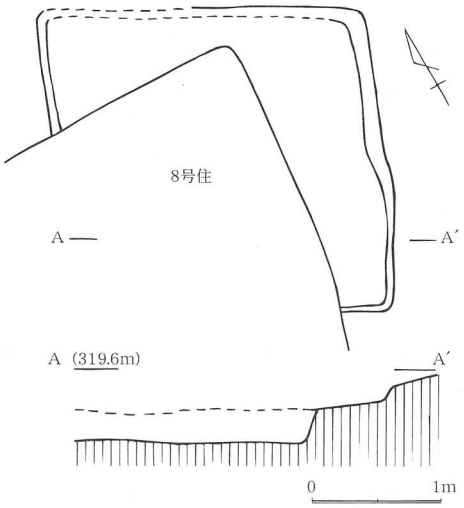
4号住居跡（第12・13図、図版1・7、第3表）

本住居跡はB－4～5グリットにかけて位置している。8号住居跡によって切られており、北側にも大きな撹乱があり遺存状態はよくない。

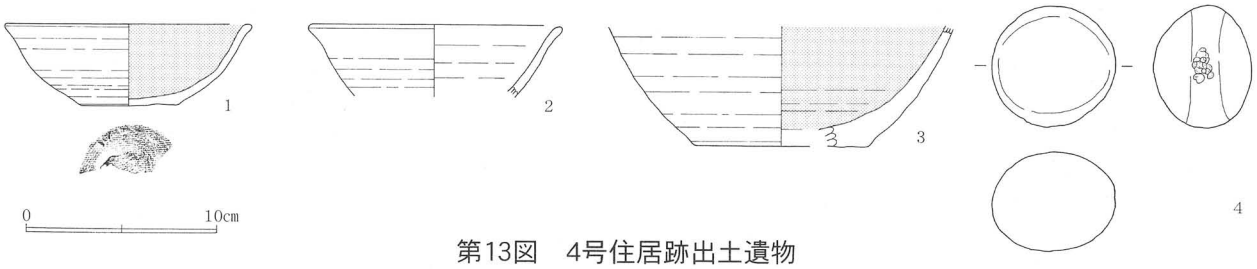
平面形は方形を呈し、規模は南北2.6 m、東西2.6 mある。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は浅く最大で15 cmほどである。床は東から西にむかって緩やかに傾斜しており、全体的に軟弱で硬化した面は確認できなかった。

カマドは確認されておらず、8号住居跡に切られた可能性が考えられる。

遺物はいずれも覆土中から土師器坏（1・2）・鉢（3）・磨石（4）が出土している。



第12図　4号住居跡



第13図　4号住居跡出土遺物

5号住居跡（第14～16図、図版1・5、第4表）

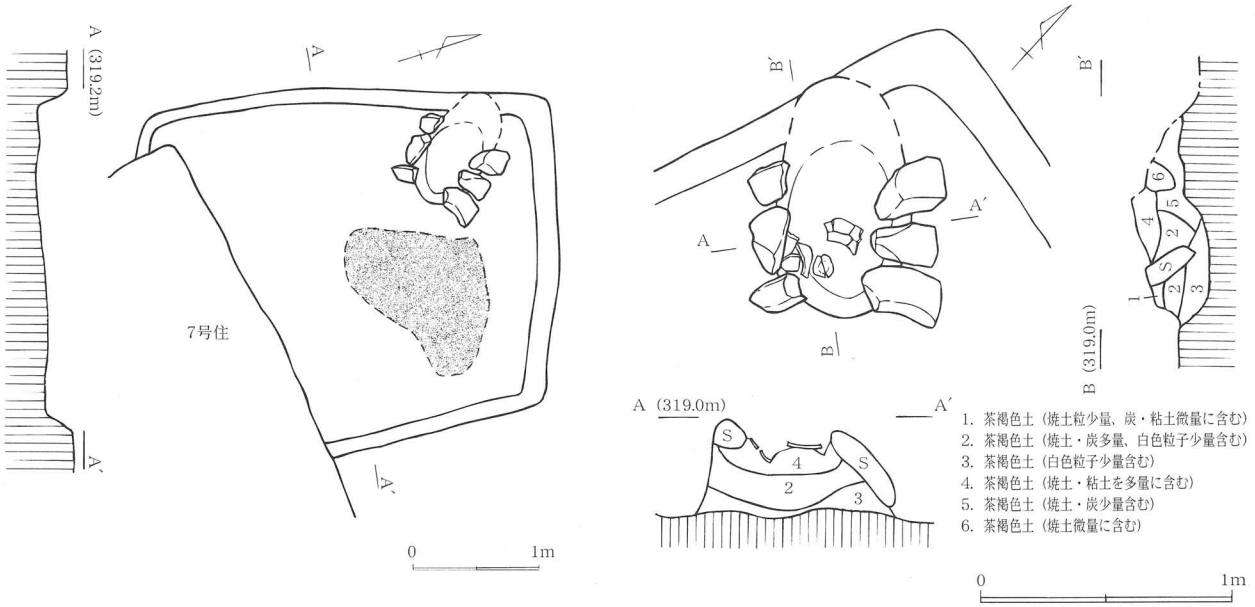
本住居跡はB－6～7グリットにかけて位置している。7号住居跡によって南側1/4が切られ、南東部にも大きな撹乱があり、カマド周辺と北東部だけしか残存しておらず、遺存状態はよくない。カマド前面の床面直上から焼土がまとまって出土している火災住居である。

平面形は長方形を呈し、規模は南北推定3.5 m、東西3.0 mあり、主軸方位はN－75°－Wを指す。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は最大で25 cmある。床にはカマド前面に焼土が厚く堆積した部分がみられ、その部分には硬い床面がみられたが、全体的には軟弱で、硬化した面は確認できなかった。

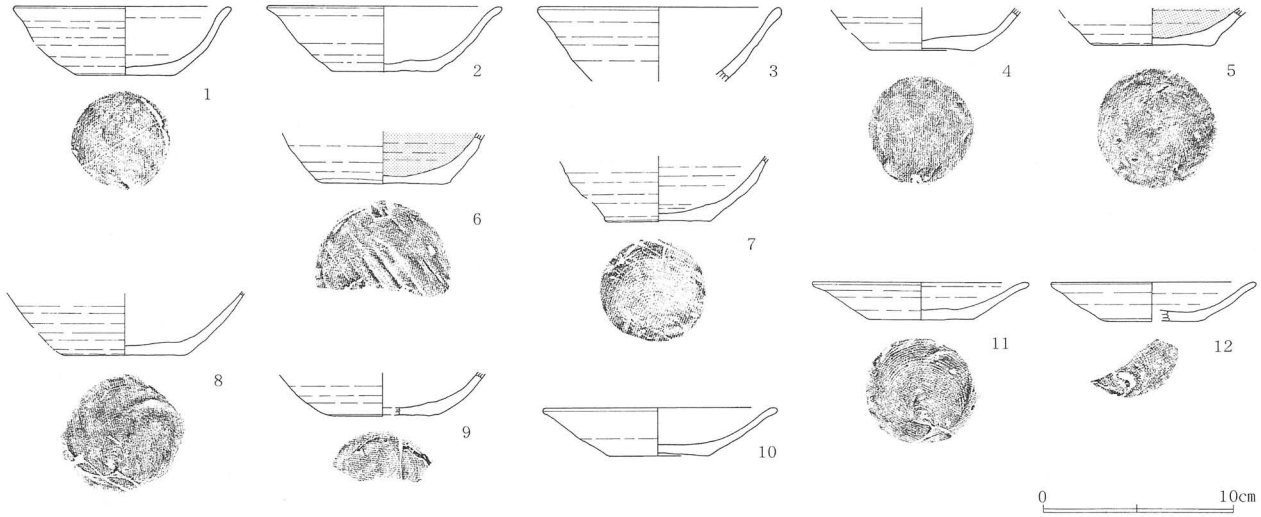
カマドは北東隅につくられている。全長約0.9 m、幅約0.85 mあり、両袖とも大きめの3つの石を並べた袖石が残存していた。燃焼部には深さ5 cmほどの掘り込みがあるが、焼土の堆積はみられなかった。

遺物の出土状況はカマド前面焼土部分から土師器坏（2・8）が、中央から東壁にかけては坏（4・7）が、北壁中央やや東寄りから小型甕（14）がそれぞれ床面上から出土している。また、カマド内からは甕（15）が出土している。

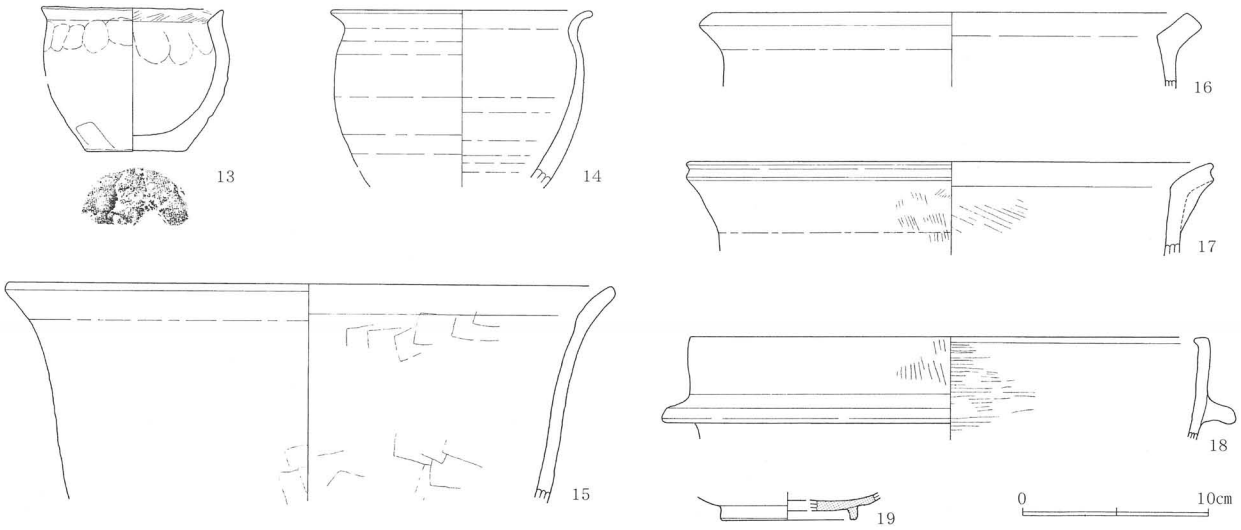
遺物は土師器坏（1～9）・皿（10～12）・鉢（13）・小型甕（14）・甕（15～17）・羽釜（18）・緑釉陶器の碗（19）が出土している。



第14図　5号住居跡



第15図　5号住居跡出土遺物(1)



第16図　5号住居跡出土遺物(2)

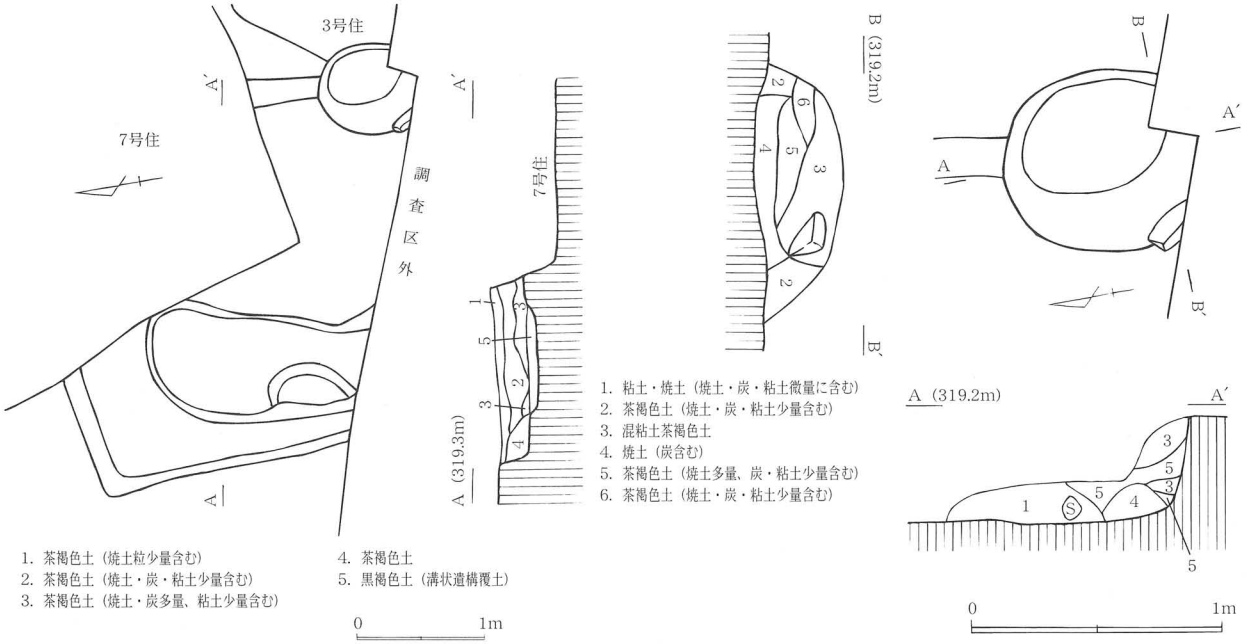
6号住居跡（第17・18図、図版2・5・7、第5表）

本住居跡はA－6～7グリットにかけて位置している。北東部約1/4を7号住居跡に切られ、南側が調査区外にのび、南東部の3号住居跡を切ってつくられている。覆土下層より焼土・炭を多く出土している火災住居である。

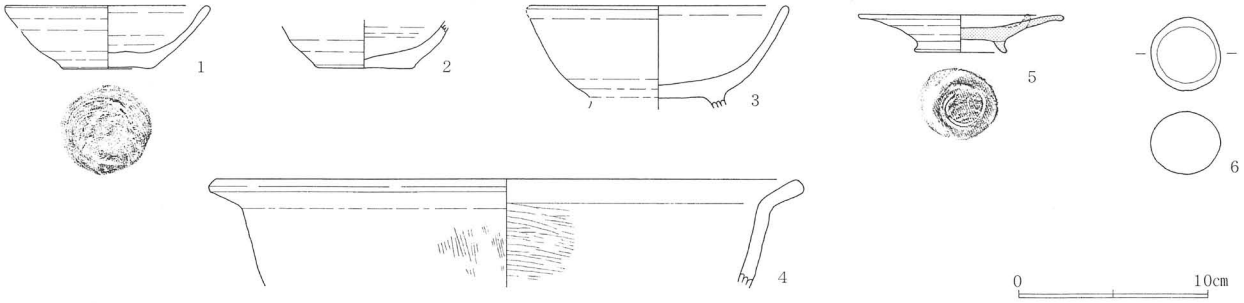
平面形は方形を呈すると思われ、規模は東西3.3 m、南北は現状で3.3 mあり、主軸方位はN－89°－Eを指す。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は最大で25 cmある。床はおおむね平坦な地山で、硬化した面は確認できなかったが、比較的しっかりしている。

カマドは南東隅につくられ、南側が一部調査区外にのびており、全長が現状で約0.8 m、幅約0.8 mある。粘土が少量残存しており、掘方から拳大ほどの石が出土しているが、袖石などの石材は確認されていない。また、燃焼部らしき掘り込みが見られ、多量の焼土がみつかっている。

住居西側に南の調査区外にのびる溝状の掘り込みが確認されている。床面より掘り込まれており、長さは現状で1.8 m、幅0.8 mあり、深さ5 cmを測る。覆土には柔らかい黒色土が充填されているが、その性格は不明である。



第17図　6号住居跡



第18図　6号住居跡出土遺物

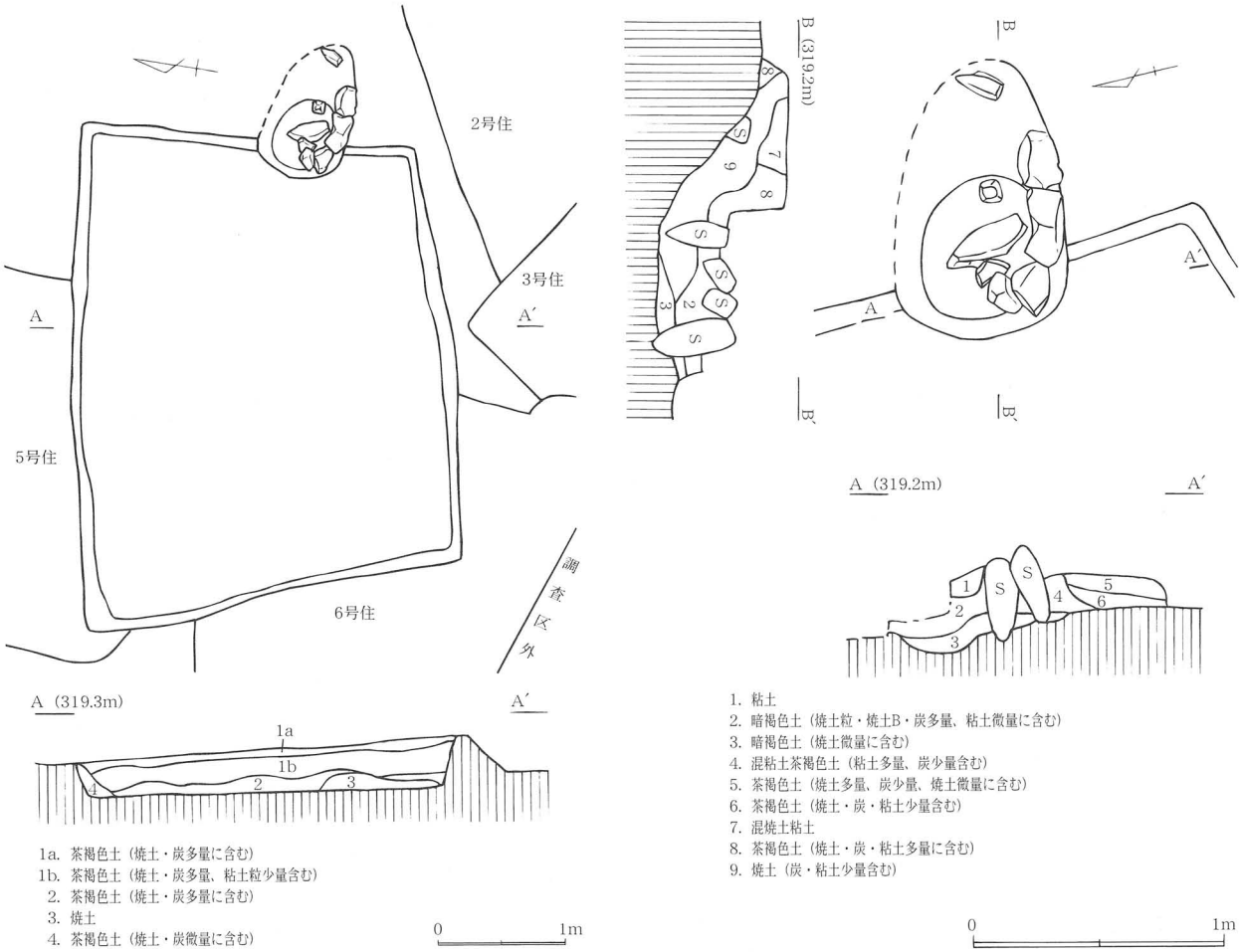
遺物の出土状況は床面から土師器の高台付坏（3）、カマド内から坏（1）・甕（4）が出土している。

遺物は土師器坏（1・2）・高台付坏（3）・甕（4）・緑釉陶器の耳皿（5）・磨石（6）などが出土している。

7号住居跡（第19～21図、図版2・6、第6表）

本住居跡はA－6・7、B－6グリットにかけて位置している。南側の6号住居跡と北側の5号住居跡を切ってつくられている。覆土下層より焼土・炭が多く出土している火災住居である。

平面形は長方形を呈し、規模は南北推定3.3 m、東西3.3 mあり、主軸方位はN－84°－Eを指す。壁は垂直に最大で25 cmほど掘り込まれている。床は地山で南から北にむかって少し傾斜しており、硬化した面は確認できなかったが、比較的しっかりしている。

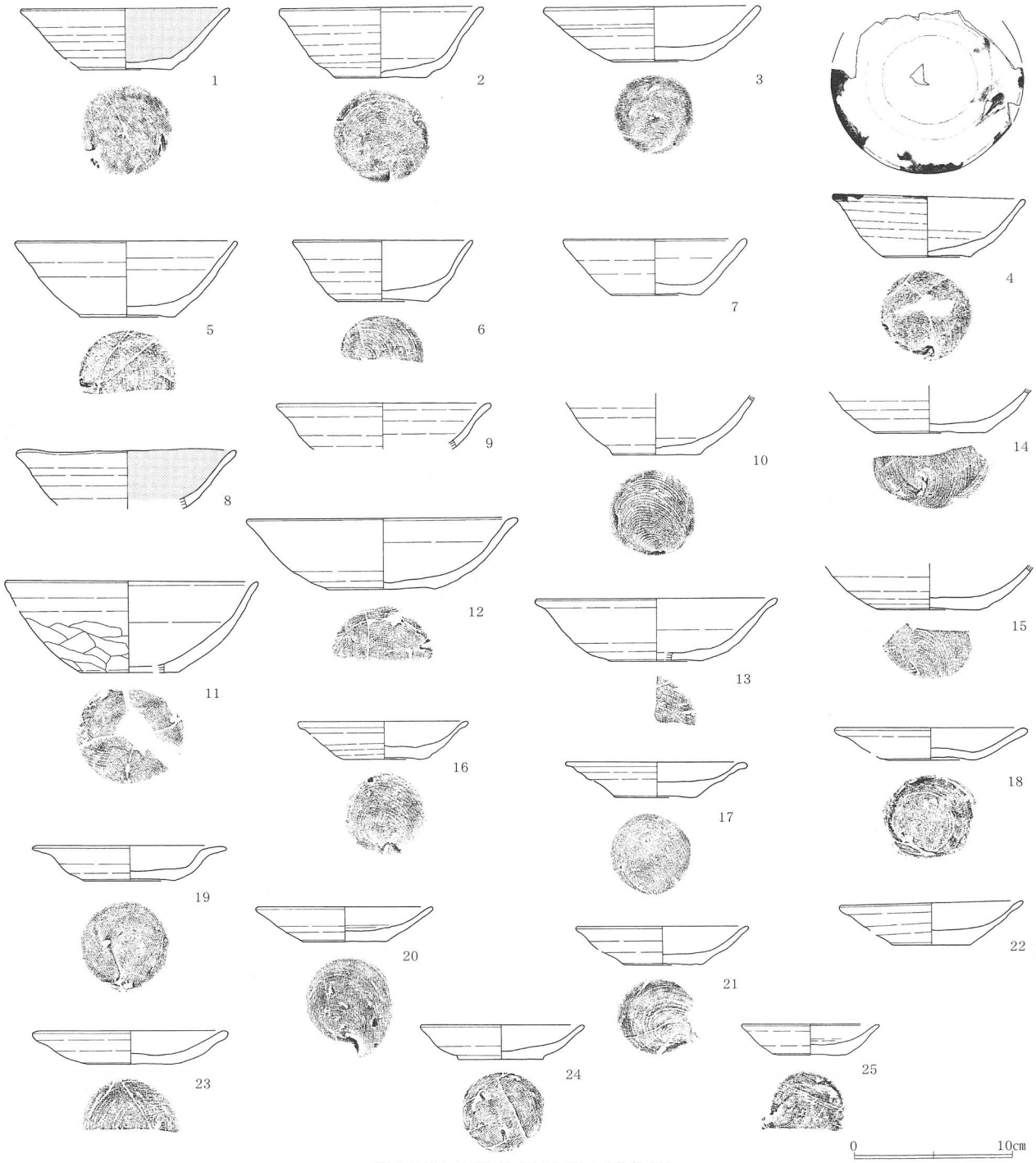


第19図　7号住居跡

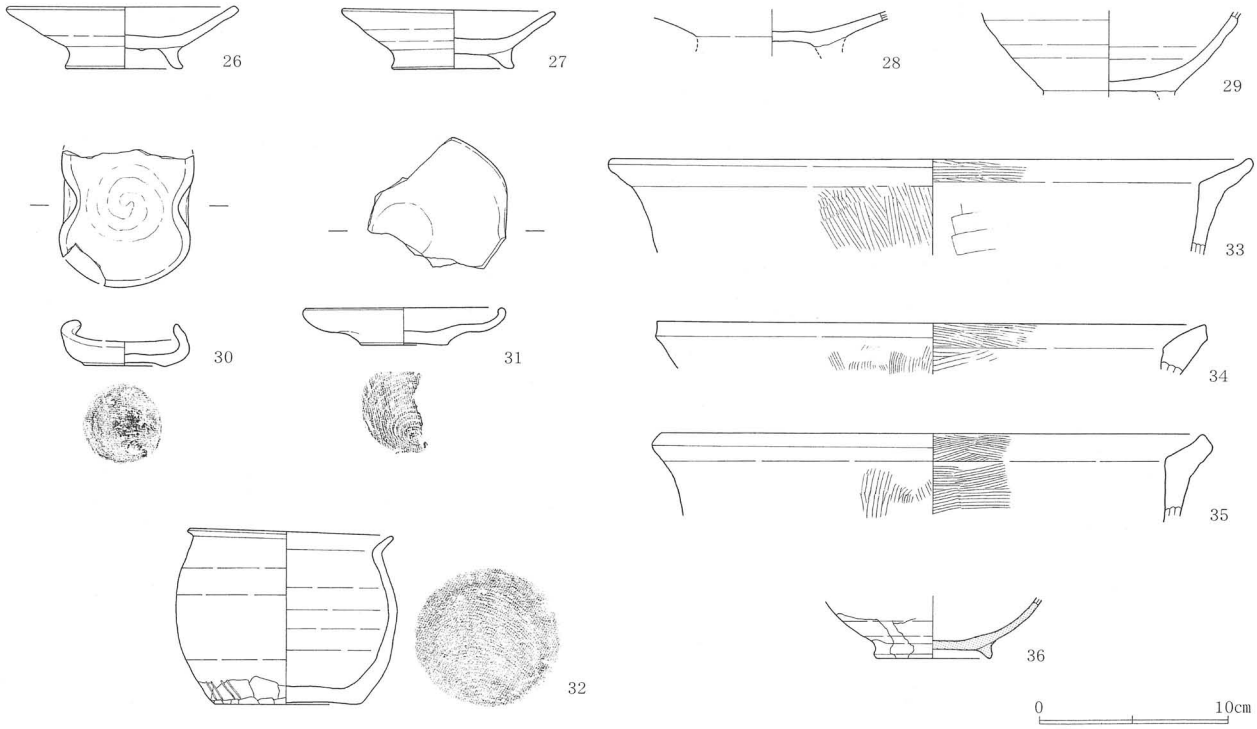
カマドは東壁中央やや南寄りにつくられており、左半分に撹乱を受けている。全長が推定 1.1 m、幅約 0.6 mあり、右袖には大きめの３つの石を並べた袖石が残存していた。カマド手前中央からは天井石らしい石がみつかっている。燃焼部にはごく浅い掘り込みがみられたが、焼土は微量しか確認されていない。

遺物は多量に出土しており、特に集中しているカマド前面から南壁にかけては土師器皿（18）が、住居中央から北壁にかけては土師器坏（２・８）、鉢（11）、皿（18）がいずれも床面上から出土している。また、カマド内からは土師器坏（４）が出土している。

遺物は土師器坏（１～10）・鉢（11～15）・皿（16～25）・高台付皿（26～28）・高台付坏（29）・耳皿（30・31）・小型甕（32）・甕（33～35）・灰釉陶器の碗（36）が出土している。坏（４）は口縁部にスス状の付着物があり、灯明皿として使用されていたものである。



第20図　7号住居跡出土遺物(1)

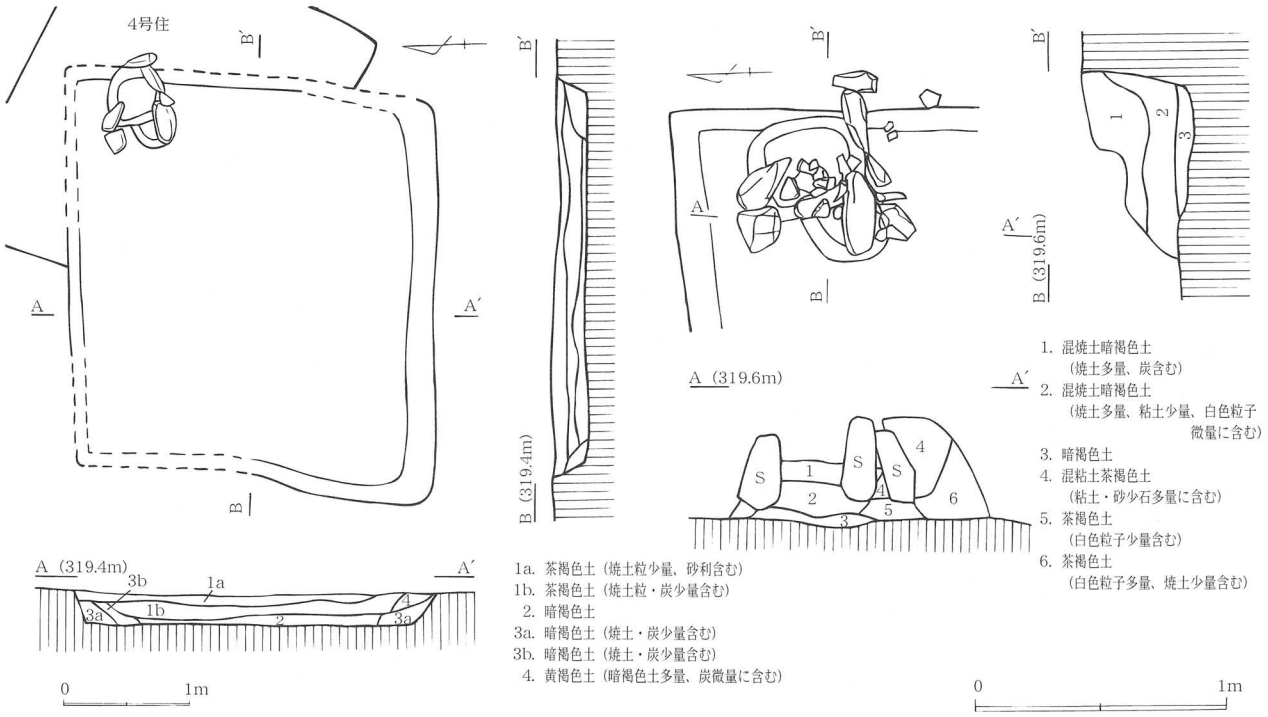


第21図　7号住居跡出土遺物(2)

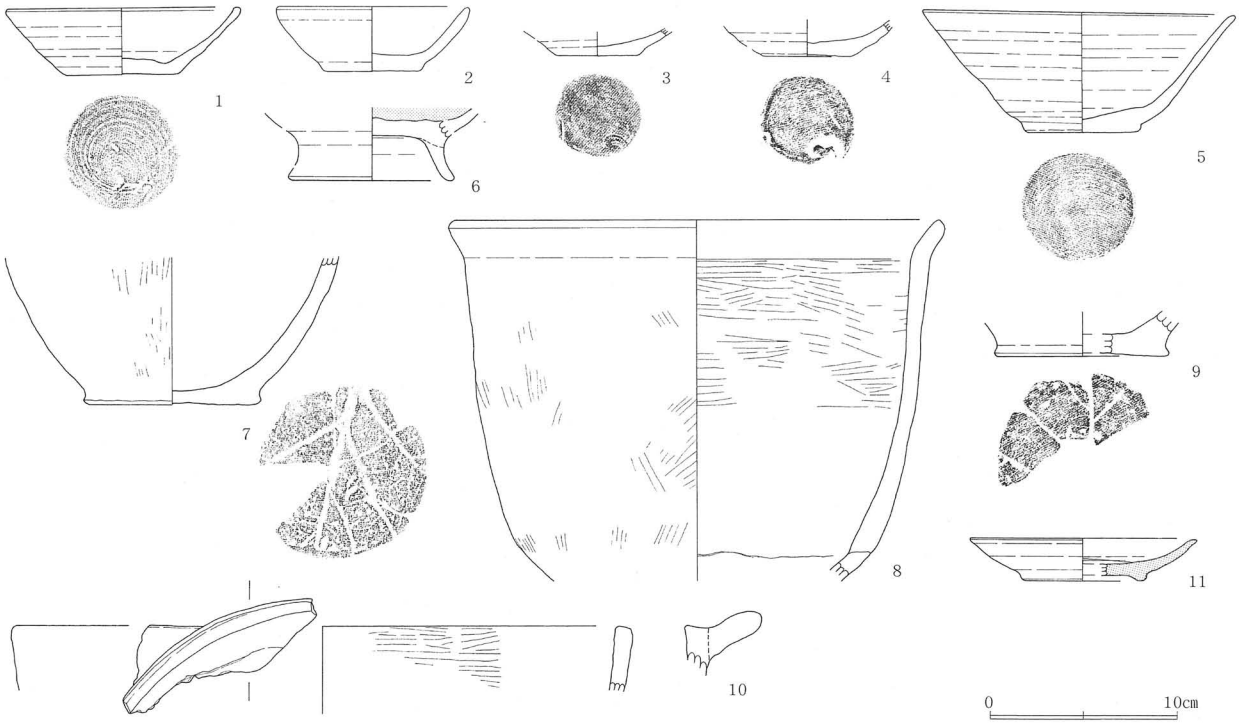
8号住居跡（第22・23図、図版2・3・5・7、第7表）

本住居跡はA～B－5グリットにかけて位置しており、4号住居跡を切ってつくられている。

平面形は方形を呈し、規模は南北3.0 m、東西3.3 mあり、主軸方位はN－90°－Eを指す。壁は垂直に最大で25 cmほど掘り込まれている。床はほぼ平坦な地山で、硬化した面は確認できなかった。カマドは東壁中央よりやや北につくられ、北壁に撹乱を受けている。全長が推定で0.8 m、幅約0.7 mあり、両袖とも袖石が残存していた。燃焼部には浅い掘り込みがあるが、焼土の堆積はみられなかった。



第22図　8号住居跡



第23図　8号住居跡出土遺物

遺物の出土状況はカマド内から土師器甕（7・9）が出土している。

遺物は土師器坏（1～4）・鉢（5）・高台付坏（6）・甕（7～9）・置きカマドの口縁部片（10）・灰釉陶器の皿（11）が出土している。

10号住居跡（第24・25図、図版3・5・7、第8表）

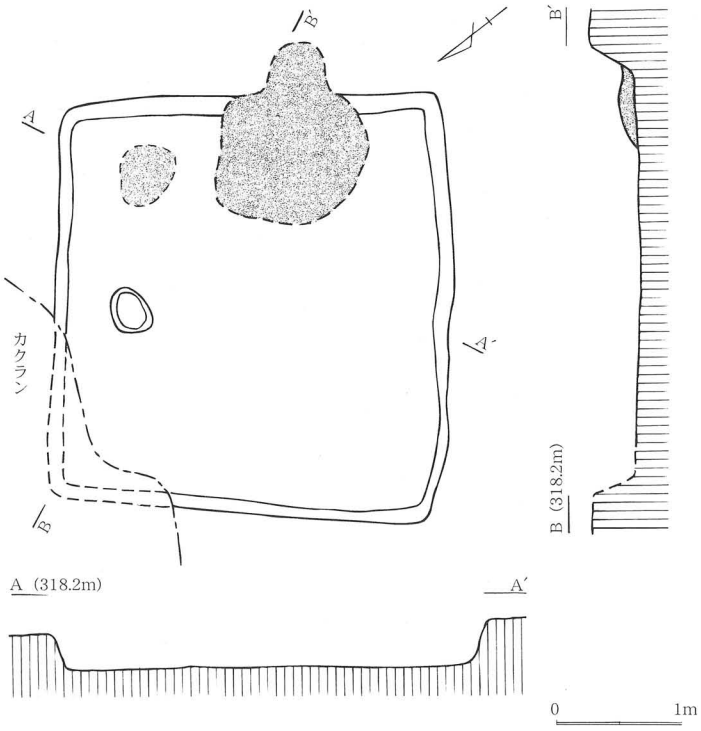
本住居跡はA・B－11・12グリットにかけて位置し、北西隅部に大きな撹乱を受けている。

平面形は方形を呈し、規模は南北3.2m、東西3.2mである。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は最大で25cmある。床はほぼ平坦な地山で、硬化した面は確認できなかったが、北東部の焼土部分に一部焼けて硬化した面がみられた。

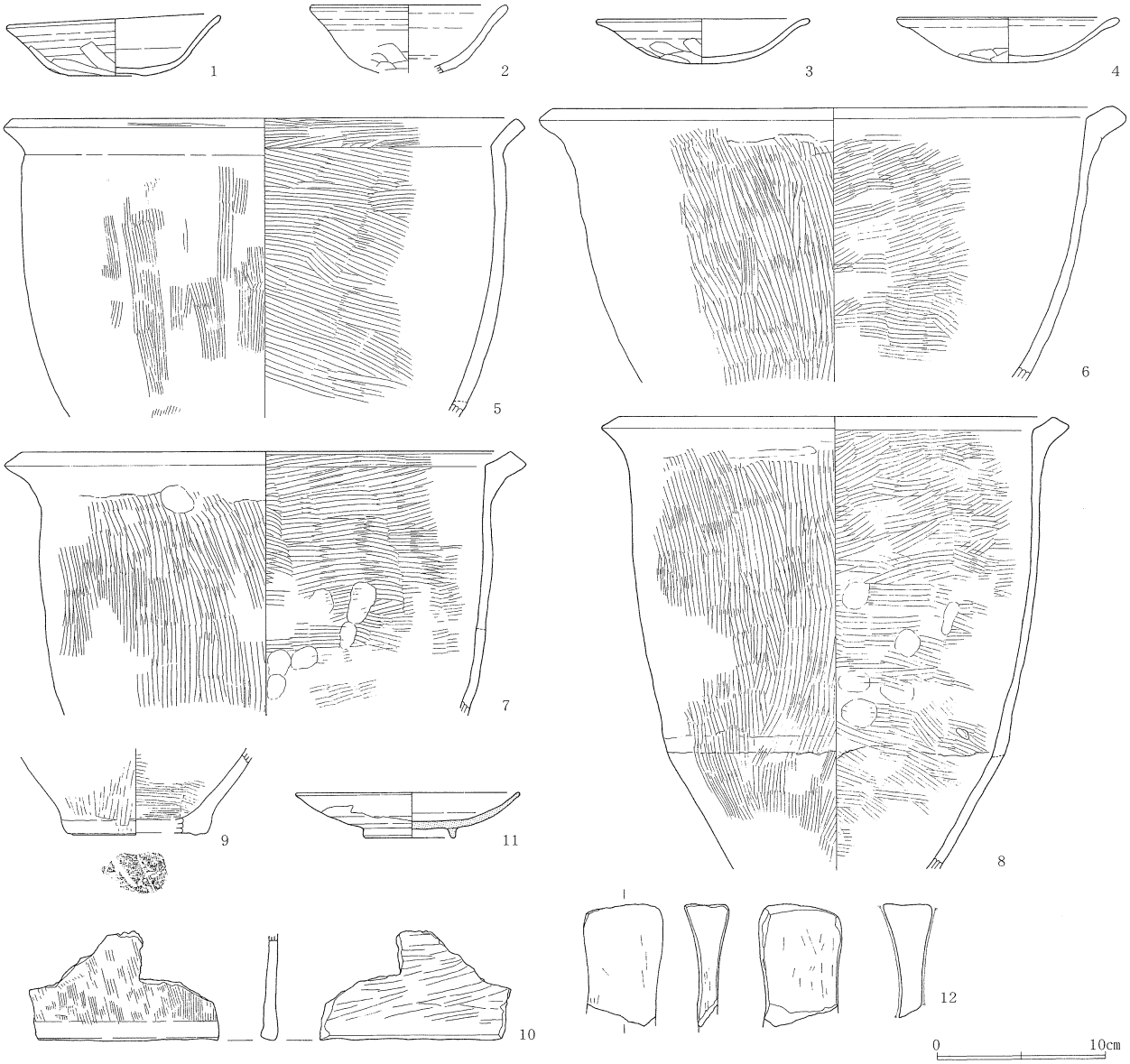
東壁中央部から焼土がまとまって出土しており、カマドであると思われるが、遺存状態が悪く、焼土範囲を確認することしかできなかった。

また、北壁中央部に長軸40cm、短軸30cm、深さ5cmほどの浅いピットが確認され、中から甕の破片が出土している。

遺物の出土状態はカマド内から甕（5・6）、灰釉陶器の皿（11）が出土し、南壁中央付近から坏（1・2）が、西壁中央や



第24図　10号住居跡



第25図　10号住居跡出土遺物

や南寄りから置きカマド（10）、砥石（12）がそれぞれ床面から出土している。

遺物は土師器坏（1・2）・皿（3・4）・甕（5～9）・置きカマドの底部片（10）・灰釉陶器の皿（11）・砥石（12）が出土している。

11号住居跡（第26・27図、図版3・6、第9表）

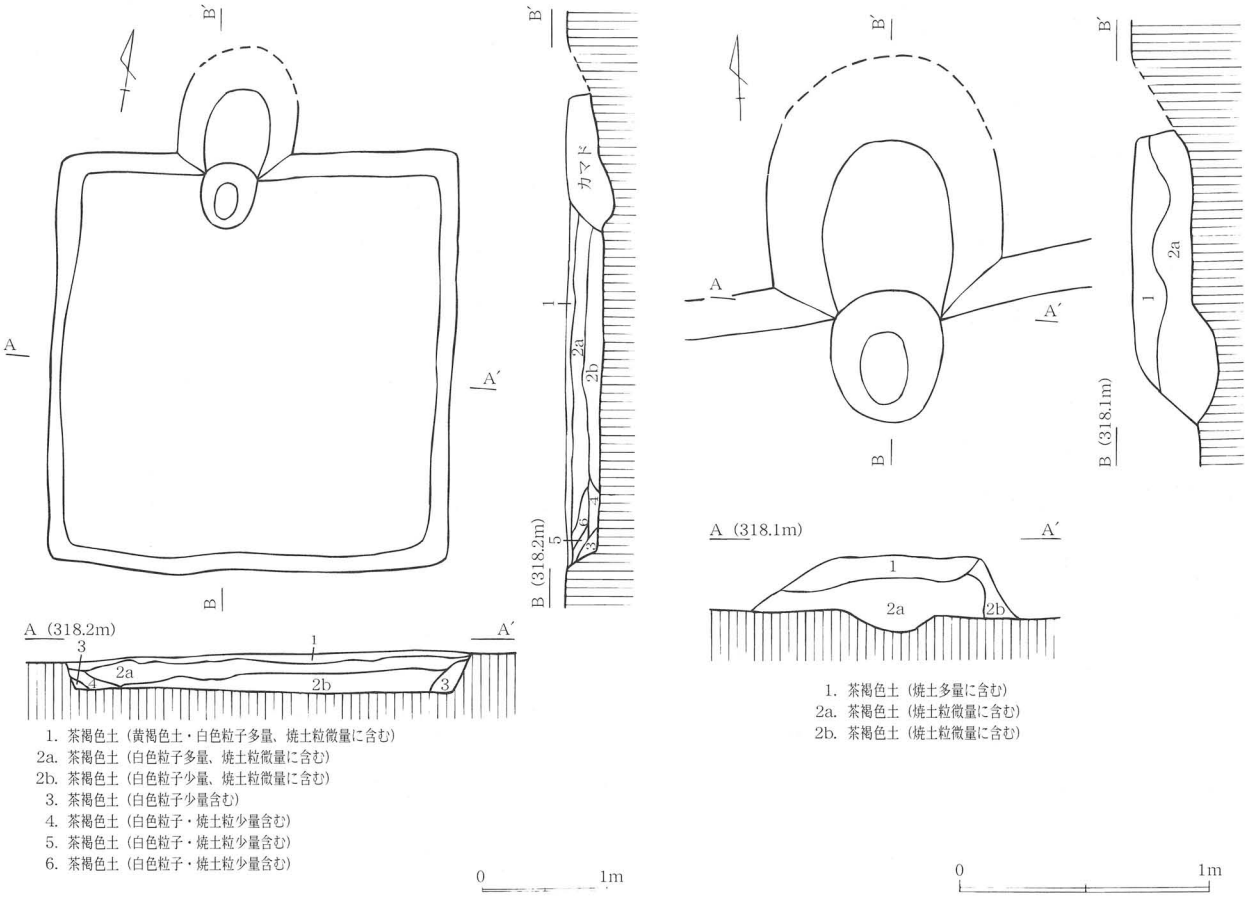
本住居跡はA・B－9グリットに位置している。

平面形は方形を呈し、規模は南北3.2 m、東西3.2 mあり、主軸方位はN－6°－Wを指す。壁は少し緩やかに立ち上がり、壁高は最大で25 cmある。床は地山で、硬化した面は確認されていない。

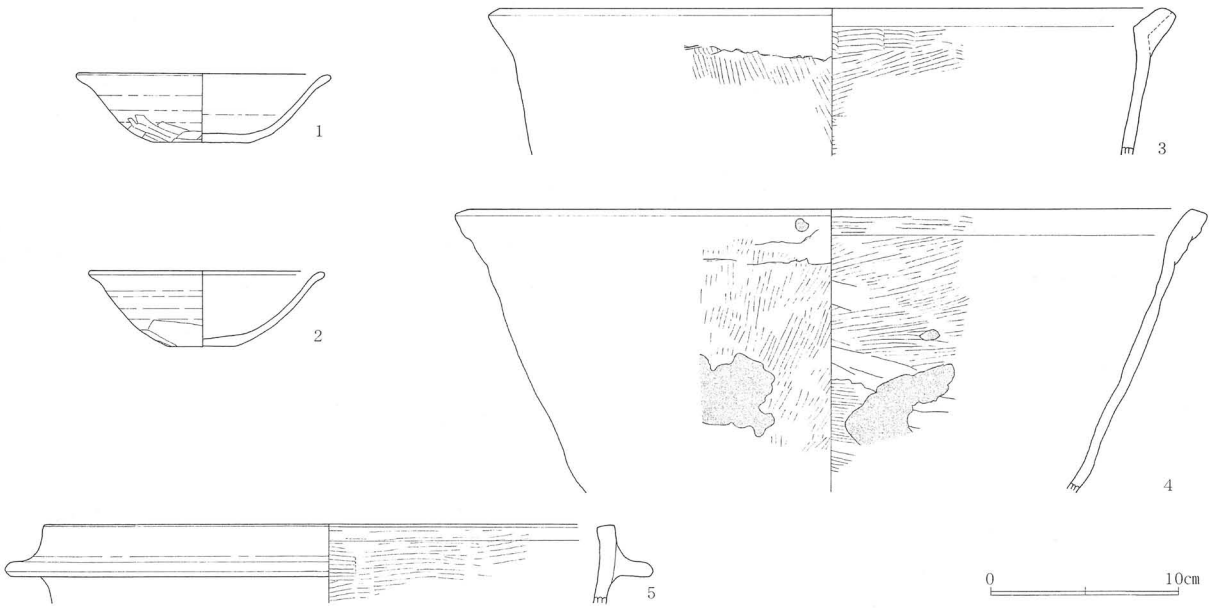
カマドは北壁中央やや西寄りにつくられており、北側は撹乱で壊されていた。全長が推定1.1 m、幅約1.2 mある。袖石などの石材は全くなく、粘土もわずかに残る程度である。燃焼部にはピット状の掘り込みがあり、そこから焼土が多量に出土した。

遺物の出土状況は坏（1・2）、甕（3・4）、羽釜（5）などほとんどの遺物がカマド内から出土しており、住居覆土中からはあまり出土していない。

遺物は土師器坏（1・2）・甕（3・4）・羽釜（5）が出土している。



第26図　11号住居跡



第27図　11号住居跡出土遺物

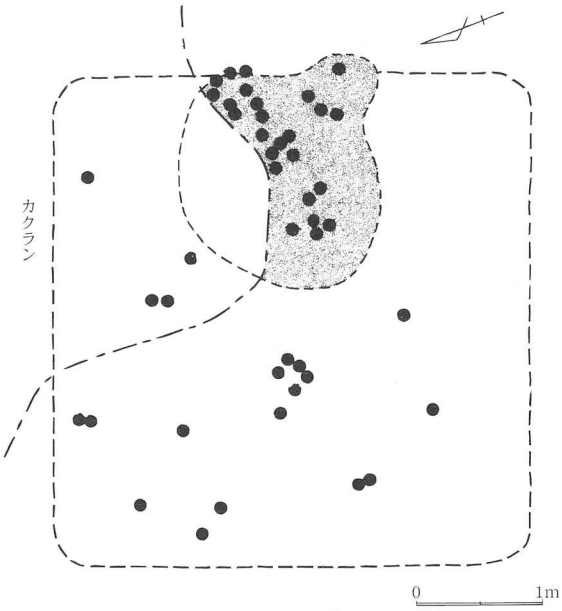
13号住居跡（第28・29図、図版3・4・6、第10表）

本住居跡はA・B－8・9グリットに位置している。大きな撹乱があり、床面も不明瞭で立ち上がりも不明だが、遺物が床面上から潰れた状態で多数出土していることから、この範囲に遺構があったと推定した。

平面形は不明だが、規模は推定で一辺2.7 mほどと推測される。床面はカマド周辺のみで、立ち上がりや硬化面などは不明である。

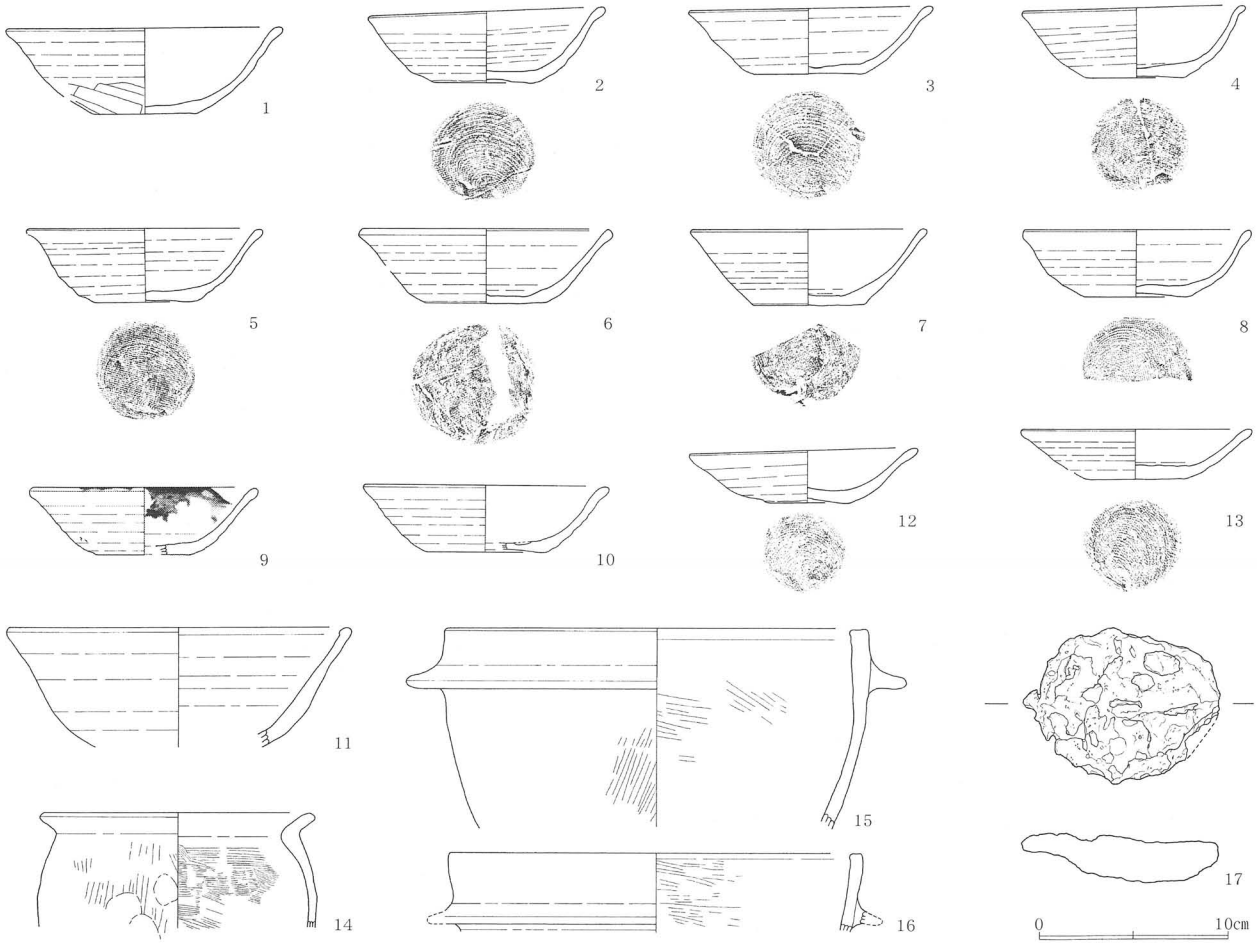
カマドらしき跡が東壁中央にあり、左側を撹乱で壊され、袖石などもなく、焼土・粘土の混ざった跡が残存しているのみである。規模は現状で全長1.6 m、幅0.8 mほどの範囲に拡がっている。

遺物の出土状況はカマド内から土師器坏（7）・皿（12）・羽釜（15・16）などが出土している。



第28図　13号住居跡

遺物は土師器坏（1～10）・鉢（11）・皿（12～13）・小型甕（14）・羽釜（15・16）・鉄滓（17）が出土している。



第29図　13号住居跡出土遺物

第１表　２号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図図版
1	土師器坏	65	口縁～底部	高 4.3 口 12.2 底 4.6	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	やや粗(白色粒子多・赤色粒子微) 良	黄橙色		10－1 5
2	土師器坏	50	口縁～底部	高 4.0 口 14.8 底 6.5	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(金雲母微)良	明赤褐色		10－2 －
3	土師器坏	10	口縁～底部	高 4.1 口 [15.8] 底 [7.0]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子・金雲母微)良	にぶい赤褐色		10－3 －
4	土師器坏	－	底部片	高 (2.2) 底 [6.0]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子多・雲母) 良	にぶい赤褐色		10－4 －
5	土師器小型甕	70	口縁～底部	高 7.8 口 11.3 底 7.0	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ	密(赤色粒子)良	暗茶褐色 橙色	底部外面黒く変色	10－5 5
6	灰釉陶器長頸壺	－	口縁部片	高 (7.8) 頸 [13.4]	内外面－ロクロ整形	緻密 良	灰白色	内外面に釉付着	10－6 －
7	緑釉陶器段皿	70	口縁～底部	高 2.9 口 [17.0] 底 9.4	内外面－ロクロ整形	緻密 良	黄オリーブ色	全面施釉 貼り付け高台	10－7 5

第２表　３号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図図版
1	土師器坏	－	口縁部片	高 (1.8) 口 [12.4]	内外面－ロクロナデ	密(赤色粒子)良	橙色		11-1 －
2	土師器坏	－	底部片	高 (1.5) 底 6.0	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子多) 良	橙色 黒褐色	黒色土器	11-2 －
3	土師器坏	－	底部片	高 (2.6) 底 [9.3]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤・白色粒子) 良	黄橙色		11-3 －
4	土師器鉢	－	底部片	高 (2.6) 底 [9.2]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子)良	黄橙色		11-4 －

第３表　４号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図図版
1	土師器坏	30	口縁～底部	高 4.4 口 [12.8] 底 [5.2]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	緻密(赤色粒子・金雲母多)良	赤褐色 暗褐色	薄い黒色土器	13-1 －
2	土師器坏	－	口縁部片	高 (3.8) 口 [13.2]	内外面－ロクロナデ	密(赤色粒子)良	明赤褐色		13-2 －
3	土師器鉢	20	底部のみ	高 (6.4) 底 [9.4]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(白色粒子多・赤色粒子)良	明赤褐色 黒褐色	黒色土器	13-3 －

遺物番号	器種	状態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考	挿図	図版
4	磨石	完形	6.5	6.4	5.3	295	閃緑岩	敲き痕あり	13-4	7

第４表　５号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図図版
1	土師器坏	50	口縁～底部	高 3.7 口 [11.3] 底 5.2	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子・金雲母) 良	明赤褐色		15-1 －
2	土師器坏	90	口縁～底部	高 3.5 口 12.4 底 5.6	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り・ナデ	密(赤色粒子多) 良	にぶい黄橙色 明赤白色	内・外面が変色 全体に磨耗している	15-2 5
3	土師器坏	－	口縁部片	高 (4.0) 口 [12.6]	内外面－ロクロナデ	密(赤色粒子・雲母) 良	黄橙色		15-3 －
4	土師器坏	－	底部のみ	高 (2.3) 底 5.6	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	緻密(赤・白色粒子) 良	にぶい黄橙色		15-4 －

5	土師器 坏	—	底部 のみ	高 (2.0) 底 6.5	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	黄橙色 黒褐色	黒色土器	15-5 －
6	土師器 坏	—	底部片	高 (2.8) 底 [6.6]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り・櫛目痕	密(赤色粒子・ 雲母) 良	橙色 黒褐色	黒色土器	15-6 －
7	土師器 坏	—	底部 のみ	高 (3.5) 底 5.6	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	緻密(赤・白色 粒子微)良	明黄橙色		15-7 －
8	土師器 坏	—	底部 のみ	高 (3.3) 底 [6.6]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	暗褐色 茶褐色	内面が著しく磨耗している	15-8 －
9	土師器 坏	—	底部 のみ	高 (2.3) 底 [6.0]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	黄橙色 黒色	内面に黒色の墨が付着しており、墨溜め用に使用された坏	15-9 －
10	土師器 皿	30	口縁～ 底部	高 2.6 口 [12.3] 底 [5.4]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子 多・白色粒子) 良	黄橙色		15-10 －
11	土師器 皿	95	口縁～ 底部	高 2.0 口 11.5 底 5.7	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子 多) 良	明赤褐色		15-11 5
12	土師器 皿	15	口縁～ 底部	高 2.1 口 [10.6] 底 [4.8]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤・白色粒 子) 良	赤褐色		15-12 －
13	土師器 鉢	70	口縁～ 底部	高 7.7 口 9.4 底 [5.6]	外面－ナデ・ヘラケズリ・指押さえ 内面－ハケ・ナデ・指押さえ 底部－木葉痕	やや粗(金・黒 雲母多) 良	暗褐色		16-13 5
14	土師器 小型甕	70	口縁～ 胴部	高 (9.5) 口 13.6	内外面－ロクロナデ	密(赤色粒子・ 雲母) 良	明赤褐色 黒褐色	外面一部黒く変色 内黒状に黒色化している	16-14 5
15	土師器 甕	—	口縁部 のみ	高 (11.6) 口 [32.0]	外面－ナデ・ヘラケズリ 内面－ナデ・ヘラナデ	やや粗(金雲 母多) 良	橙色		16-15 －
16	土師器 甕	—	口縁部 片	高 (4.0) 口 [25.0]	内外面－ナデ	密(雲母多) 良	暗茶褐色		16-16 －
17	土師器 甕	—	口縁部 片	高 (5.0) 口 [27.8]	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(雲母 多) 良	暗黒褐色		16-17 －
18	土師器 羽釜	—	口縁部 片	高 (5.5) 口 [27.6]	内外面－ハケ・ナデ・指押さえ	やや粗(雲母 多・白色粒子) 良	暗黒褐色		16-18 －
19	緑釉陶器 碗	—	底部 のみ	高 (1.5) 底 [7.1]	内外面－ロクロ整形	緻密 良	黄オリーブ色	全面施釉 貼り付け高台	16-19 －

第５表　６号住居跡遺物観察表

遺物番号	種 別 器 種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
1	土師器 坏	65	口縁～ 底部	高 3.4 口 [10.7] 底 4.8	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(白色粒子) 良	橙色		18-1 5
2	土師器 坏	—	底部片	高 (2.6) 底 [5.0]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り→ハケ	密(赤色粒子) 良	橙色	内外面にスス付着	18-2 －
3	土師器 高台付坏	80	口縁～ 底部	高 (5.5) 口 13.8 底 (7.5)	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(白色粒子・ 雲母微) 良	橙色	貼り付け高台	18-3 5
4	土師器 甕	—	口縁部 片	高 (5.8) 口 [30.8]	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(白色 粒子) 良	暗茶褐色		18-4 －
5	緑釉陶器 耳皿	30	口縁～ 底部	高 2.0 口 [10.6] 底 [4.6]	内外面－ロクロ整形 底部－回転糸切り	緻密 良	オリーブ色	全面施釉 貼り付け高台	18-5 －

遺物番号	器種	状 態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	備 考	挿図	図版
6	磨石	完形	3.9	3.7	3.4	72	砂岩		18-6	7

第６表　７号住居跡遺物観察表

遺物番号	種 別 器 種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
1	土師器 坏	40	口縁～ 底部	高 4.0 口 [13.4] 底 6.0	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子) 良	赤褐色 黒色	黒色土器	20-1 －
2	土師器 坏	60	口縁～ 底部	高 4.6 口 13.3 底 6.0	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子 多) 良	黄白色		20-2 －

3	土師器 坏	30	口縁～ 底部	高　3.6 口［13.9］ 底　5.2	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子・ 雲母）　良	にぶい 橙色		20-3 －
4	土師器 坏	75	口縁～ 底部	高　3.7 口　12.2 底　5.4	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子） 良	橙色	口唇部にスス状の付着物あり、灯明皿として使用された坏	20-4 6
5	土師器 坏	40	口縁～ 底部	高　5.0 口［14.0］ 底　6.2	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子 微）　良	赤褐色	内外面にスス付着	20-5 －
6	土師器 坏	30	口縁～ 底部	高　4.0 口［11.6］ 底［ 6.0］	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子・ 雲母微）　良	橙色		20-6 －
7	土師器 坏	20	口縁～ 底部	高　3.7 口［11.8］ 底［ 5.7］	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（白色粒子・ 雲母）　良	赤褐色		20-7 －
8	土師器 坏	65	口縁部 のみ	高（ 3.8） 口　14.0	内外面－ロクロナデ	密 良	黄褐色 黒色	黒色土器	20-8 －
9	土師器 坏	－	口縁部 片	高（ 3.0） 口［13.7］	内外面－ロクロナデ	密（赤色粒子 微）　良	暗褐色		20-9 －
10	土師器 坏	55	胴部～ 底部	高（ 4.0） 底　5.8	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子 微）　良	にぶい 橙色		20-10 －
11	土師器 鉢	70	口縁～ 底部	高　6.0 口［16.2］ 底　6.2	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密（赤色粒子・ 金雲母微） 良	赤褐色	表面に一部剥がれた状態がみられる	20-11 6
12	土師器 鉢	35	口縁～ 底部	高　4.7 口［17.4］ 底　7.0	内外面－ロクロナデ→ナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子 微）　良	橙色 暗褐色	内外面に焼けて黒く変色した部分あり	20-12 －
13	土師器 鉢	25	口縁～ 底部	高　4.1 口［15.5］ 底［ 6.0］	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子） 良	にぶい 赤褐色		20-13 －
14	土師器 鉢	－	底部片	高（ 3.0） 底［ 7.0］	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子 微）　良	赤褐色		20-14 －
15	土師器 鉢	15	胴部～ 底部	高（ 3.0） 底［ 6.2］	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子） 良	黒黄褐色 明赤褐色		20-15 －
16	土師器 皿	75	口縁～ 底部	高　2.5 口［11.0］ 底　5.3	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子 多・雲母微） 良	橙色		20-16 －
17	土師器 皿	25	口縁～ 底部	高　2.3 口［11.3］ 底　5.3	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子・ 金雲母）　良	橙色		20-17 －
18	土師器 皿	35	口縁～ 底部	高　2.1 口［12.2］ 底　5.5	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子） 良	橙色 赤褐色		20-18 －
19	土師器 皿	85	口縁～ 底部	高　2.3 口　12.2 底　5.9	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子・ 雲母微）　良	黄橙色 橙色		20-19 6
20	土師器 皿	75	口縁～ 底部	高　2.2 口　11.4 底　5.6	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子 多・雲母）　良	赤褐色		20-20 6
21	土師器 皿	55	口縁～ 底部	高　2.5 口［11.2］ 底　5.0	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子） 良	赤褐色		20-21 6
22	土師器 皿	60	口縁～ 底部	高　2.6 口［11.5］ 底　4.8	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子・ 雲母微）　良	黄橙色 橙色		20-22 －
23	土師器 皿	15	口縁～ 底部	高　2.2 口［12.0］ 底［ 5.7］	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子 多）良	赤褐色		20-23 －
24	土師器 皿	80	口縁～ 底部	高　2.3 口　10.5 底　5.4	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子 多・雲母微） 良	にぶい 橙色		20-24 6
25	土師器 皿	20	口縁～ 底部	高　2.0 口［ 8.9］ 底［ 4.4］	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密（赤色粒子・ 金雲母）　良	にぶい 橙色		20-25 －
26	土師器 高台付皿	50	口縁～ 底部	高　3.3 口　12.0 底　6.2	内外面－ロクロナデ	密（赤色粒子 微）　良	黄橙色	貼り付け高台	20-26 6
27	土師器 高台付皿	80	口縁～ 底部	高　3.0 口　11.6 底　6.5	内外面－ロクロナデ	密（赤色粒子 微）　良	黄橙色	貼り付け高台	21-27 6

28	土師器 高台付皿	60	胴部～ 底部	高 (2.0)	内外面－ロクロナデ	密(赤色粒子) 良	橙色		21-28 －
29	土師器 高台付坏	30	胴部～ 底部	高 (5.3)	内外面－ロクロナデ	密 良	にぶい 赤褐色		21-29 －
30	土師器 耳皿	80	口縁～ 底部	高 2.4 口 [8.8] 底 5.3	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子 多) 良	暗褐色		21-30 6
31	土師器 耳皿	20	口縁～ 底部	高 2.0 口 [10.4] 底 [4.6]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子 微) 良	黄橙色 明橙色		21-31 －
32	土師器 小型甕	90	口縁～ 底部	高 9.2 口 10.8 底 7.5	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 底部－糸切り→ヘラケズリ	密(赤色粒子) 良	黒赤褐色 赤褐色	外面にスス付着	21-32 6
33	土師器 甕	－	口縁部 片	高 (5.0) 口 [33.6]	外面－ハケ 内面－ハケ・ヘラナデ	やや粗(白色 粒子) 良	赤茶褐色		21-33 －
34	土師器 甕	－	口縁部 片	高 (2.7) 口 [29.0]	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(白色 粒子) 良	黒褐色		21-34 －
35	土師器 甕	－	口縁部 片	高 (4.7) 口 [28.6]	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(白色 粒子・金雲母 多) 良	暗茶褐色		21-35 －
36	灰釉陶器 碗	15	胴部～ 底部	高 (3.5) 底 [6.0]	内外面－ロクロ整形	緻密 良	灰白色	外面に釉付着 貼り付け高台	21-36 6

第７表　８号住居跡遺物観察表

遺物番号	種 別 器 種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
1	土師器 坏	80	口縁～ 底部	高 3.6 口 12.3 底 6.0	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤・白色粒 子・雲母) 良	橙色		23-1 5
2	土師器 坏	60	口縁～ 底部	高 3.5 口 [10.2] 底 5.2	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤・白色粒 子) 良	明赤褐色		23-2 5
3	土師器 坏	－	底部片	高 (1.2) 底 [4.4]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	緻密(赤色粒 子多) 良	明赤褐色		23-3 －
4	土師器 坏	－	底部片	高 (2.0) 底 [4.6]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子) 良	橙色		23-4 －
5	土師器 鉢	60	口縁～ 底部	高 6.5 口 [16.6] 底 6.0	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(白色粒子・ 雲母多・赤色 粒子) 良	暗褐色		23-5 5
6	土師器 高台付坏	－	高台部 のみ	高 (3.9) 脚 [8.8]	内外面－ロクロナデ	密(赤・白色粒 子) 良	茶褐色 黒褐色	黒色土器 貼り付け高台	23-6 －
7	土師器 甕	20	胴部～ 底部	高 (7.9) 底 [9.0]	外面－ハケ・ナデ 内面－ナデ 底部－木葉痕	やや粗(白・黒 色粒子・雲母) 良	暗褐色		23-7 －
8	土師器 甕	35	口縁～ 胴部	高 (19.3) 口 [26.0]	内外面－ハケ・ナデ	密(白色粒子・ 雲母) 良	茶褐色		23-8 5
9	土師器 甕	－	底部片	高 (2.4) 底 [9.2]	内外面－ナデ 底部－木葉痕	やや粗(雲母 多・白色粒子) 良	にぶい 黄橙色		23-9 －
10	土師器 置き カマド	－	口縁部 片	高 (3.5) 口 [33.0]	外面－ナデ・指頭痕 内面－ハケ	やや粗(金雲 母多) 良	赤褐色 黒褐色		23-10 7
11	灰釉陶器 皿	20	口縁～ 底部	高 2.3 口 [12.0] 底 [6.4]	内外面－ロクロ整形	緻密 良	灰白色	内面に釉付着	23-11 －

第８表　10号住居跡遺物観察表

遺物番号	種 別 器 種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
1	土師器 坏	80	口縁～ 底部	高 3.6 口 12.5 底 4.7	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(赤色粒子 多) 良	赤褐色		25-1 5
2	土師器 坏	10	口縁～ 胴部	高 (4.1) 口 [11.6]	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(赤・白色粒 子多・金雲母) 良	にぶい 橙色		25-2 －
3	土師器 皿	95	口縁～ 底部	高 2.7 口 12.4	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(赤色粒子 多) 良	にぶい 赤褐色 暗茶褐色		25-3 5

4	土師器 皿	35	口縁～ 底部	高　2.7 口［13.0］	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(赤色粒子多・金雲母) 良	橙色		25-4 －
5	土師器 甕	－	口縁～ 胴部	高（16.0） 口［30.0］	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(白色粒子多)　良	にぶい 暗黄橙色		25-5 －
6	土師器 甕	－	口縁部 片	高（16.0） 口　33.2	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(白色粒子)　良	暗茶褐色		25-6 －
7	土師器 甕	－	口縁～ 胴部	高（27.0） 口［25.6］	外面－ハケ・指押さえ・ナデ 内面－ハケ・ナデ	やや粗(白色粒子・金雲母多)　良	暗茶褐色		25-7 5
8	土師器 甕	－	口縁～ 胴部	高（15.7） 口［29.0］	外面－ハケ 内面－ハケ・指押さえ	やや粗(白色粒子・金雲母多)　良	暗茶褐色 暗赤褐色		25-8 5
9	土師器 甕	－	胴部～ 底部	高（ 5.2） 底［ 8.4］	内外面－ハケ・ナデ 底部－木葉痕	やや粗(金雲母多)　良	暗褐色		25-9 －
10	土師器 置き カマド	－	底部片	－	内外面－ハケ	やや粗(金雲母多)　良	赤褐色 暗赤褐色		25-10 7
11	灰釉陶器 皿	95	口縁～ 底部	高　2.7 口　13.3 底　5.3	内外面－ロクロ整形	緻密 良	灰色	内外面に釉付着	25-11 5

遺物番号	器種	状　態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	備　考	挿図	図版
12	砥石	一部欠	(7.2)	4.7	2.6	105	砂岩		25-12	7

第９表　11号住居跡遺物観察表

遺物番号	種 別 器 種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
1	土師器 坏	50	口縁～ 底部	高　3.7 口［13.3］ 底　5.0	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(赤色粒子・雲母)　良	明赤褐色 黄橙色		27-1 －
2	土師器 坏	60	口縁～ 底部	高　4.0 口　12.3 底　3.6	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(赤・白色粒子・雲母)　良	にぶい 橙色		27-2 6
3	土師器 甕	－	口縁部 片	高（ 7.8） 口［35.0］	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(金雲母多)　良	明赤褐色		27-3 －
4	土師器 甕	－	口縁部 片	高（15.0） 口［40.4］	外面－ハケ・ナデ 内面－ハケ・ヘラナデ・ナデ	やや粗(金雲母多・白色粒子)　良	赤褐色	内外面に焼土が多量に付着	27-4 －
5	土師器 羽釜	－	口縁部 片	高（ 4.2） 口［30.2］	外面－ナデ・指押さえ 内面－ハケ	やや粗(金雲母多)　良	赤褐色		27-5 －

第10表　13号住居跡遺物観察表

遺物番号	種 別 器 種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
1	土師器 坏	50	口縁～ 底部	高　4.6 口［14.5］ 底　5.5	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(白色粒子多・赤色粒子) 良	橙色		29-1 －
2	土師器 坏	98	ほぼ 完形	高　3.8 口　12.3 底　5.3	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子多)　良	明赤褐色		29-2 6
3	土師器 坏	100	完形	高　3.5 口　12.7 底　5.8	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤・白色粒子多)　良	明赤褐色	全体的に磨耗している	29-3 6
4	土師器 坏	80	口縁～ 底部	高　3.7 口　11.7 底　5.2	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤・白色粒子・金雲母) 良	明赤褐色	全体的に磨耗している	29-4 6
5	土師器 坏	75	口縁～ 底部	高　3.9 口［12.4］ 底　5.3	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子) 良	赤褐色		29-5 6
6	土師器 坏	75	口縁～ 底部	高　4.0 口［13.0］ 底　6.2	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子多)　良	にぶい 赤褐色 赤褐色		29-6 6
7	土師器 坏	30	口縁～ 底部	高　4.1 口［12.3］ 底［ 5.9］	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤・黒色粒子多)　良	赤褐色		29-7 －

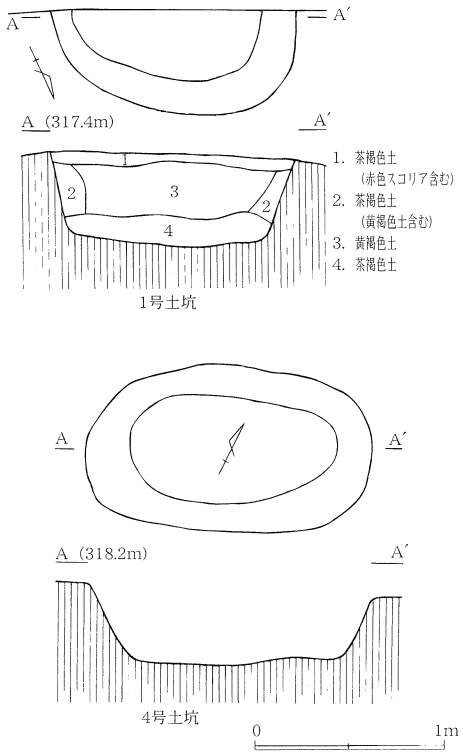
8	土師器 坏	30	口縁～ 底部	高　3.6 口 [12.1] 底 [5.6]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子多)　良	橙色		29-8 －
9	土師器 坏	10	口縁～ 底部	高　3.6 口 [11.8] 底 [5.2]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子) 良	暗褐色 にぶい 橙色	口唇部ににスス状の付着物あり、灯明皿として使用された坏	29-9 －
10	土師器 坏	25	口縁～ 底部	高　3.6 口 [12.6] 底 [6.4]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤・白色粒子多)　良	にぶい 黄橙色		29-10 －
11	土師器 鉢	－	口縁部 片	高 (6.3) 口 [18.0]	内外面－ロクロナデ	密(赤・黒色粒子)　良	黄橙色		29-11 －
12	土師器 皿	90	口縁部 一部欠	高　2.8 口　12.0 底　4.4	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤・白色粒子多)　良	明赤褐色	全体的に磨耗している	29-12 6
13	土師器 皿	40	口縁～ 底部	高　2.7 口 [12.1] 底　5.2	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤・黒色粒子多)　良	赤褐色		29-13 －
14	土師器 小型甕	－	口縁部 片	高 (6.2) 口 [14.2]	外面－ハケ・指押さえ 内面－ハケ・ナデ	密(白色粒子) 良	暗褐色		29-14 －
15	土師器 羽釜	－	口縁部 片	高 (10.7) 口 [22.4]	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(赤色粒子多)　良	暗褐色 橙色		29-15 －
16	土師器 羽釜	－	口縁部 片	高 (4.2) 口 [21.8]	外面－ナデ 内面－ナデ・指頭痕	やや粗(白色粒子多)　良	橙色		29-16 －

遺物番号	種　類	出土位置	状　態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　考	挿図図版
17	鉄滓	13号住	一部欠	9.7	8.3	2.3	255	椀形滓	29-17 6

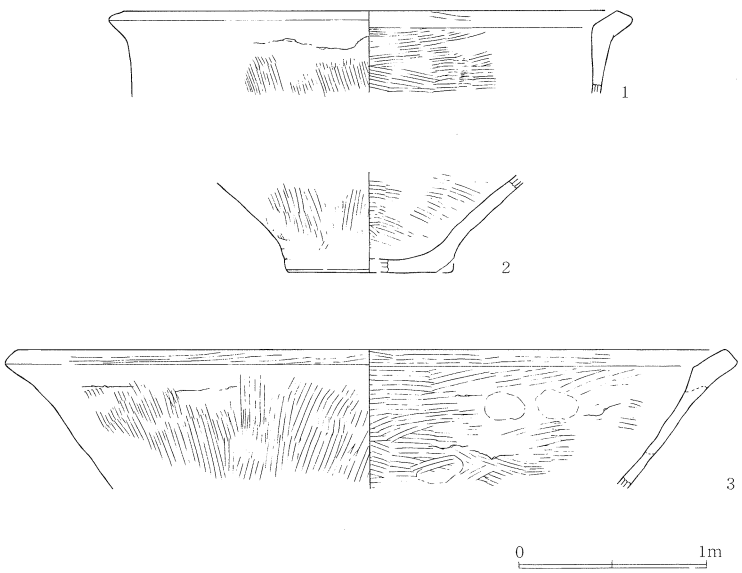
2. 土坑（第 30・31 図、図版 4、第 11 ～ 13 表）

本遺跡から今回確認された土坑は５基あり、そのうち平安時代のものが２基（１・４号土坑）確認されている。各土坑の詳細については図と観察表を参照されたい。

１号土坑からは土師器の甕（１・２）が出土しており、10 世紀代に属するものと思われる。４号土坑からは土師器の甕（３）が出土しており、10 世紀後半代のものと思われる。



第30図　土坑（平安時代）



第31図　土坑出土遺物（平安時代）

第11表　土坑一覧表　（平安時代）

土坑No.	グリット	重　複	平面形	規模（cm）		備　　考	挿図No.	図版No.
				大　き　さ	深　さ			
1	A－11	—	楕円形	130×(60)	50	南側一部調査区外	30	4
4	B－10	—	楕円形	60×(37)	40		30	4

第12表　1号土坑遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	文様・調整・技法	胎土	色調	備考	挿図図版
1	土師器甕	-	口縁部片	高（4.4） 口［26.4］	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(赤・白色粒子・金雲母）良	暗茶褐色		31-1 -
2	土師器甕	-	底部片	高（5.3） 底［8.6］	内外面－ハケ・ナデ 底部－木葉痕	やや粗(白色粒子・金雲母多）良	暗褐色 黄橙色		31-2 -

第13表　4号土坑遺物観察表

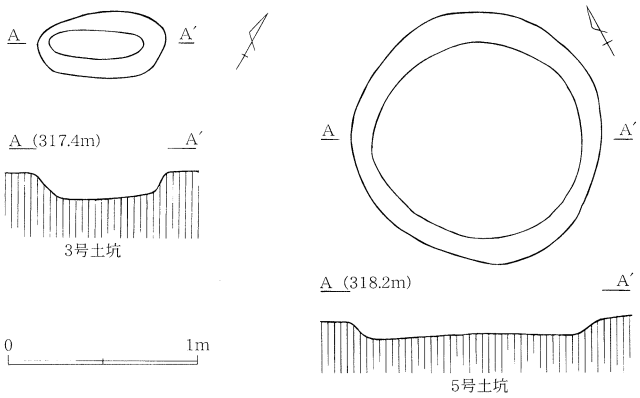
遺物番号	種別器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	文様・調整・技法	胎土	色調	備考	挿図図版
1	土師器甕	-	口縁部片	高（7.4） 口［26.4］	外面－ハケ・ナデ 内面－ハケ・指押さえ	やや粗(赤・白色粒子・金雲母多）良	にぶい暗橙色		31-3 -

第3節　時期不明の遺構

1. 土坑（第32図、図版4、第14表）

本遺跡から今回確認された土坑は5基あり、そのうち時期不明のものが2基（3・5号土坑）ある。各土坑の詳細については図と観察表を参照されたい。

3・5号土坑はいずれも単層で遺物もなく、深さも10cm前後と浅く、重複関係もない。平面形も円形・楕円形で、覆土はいずれも茶褐色土が主体である。



第32図　土坑（時期不明）

第14表　土坑一覧表　（時期不明）

土坑No.	グリット	重　複	平面形	規模（cm）		備　　考	挿図No.	図版No.
				大　き　さ	深　さ			
3	A－12	—	楕円形	60×(36)	35		32	4
5	A－10	—	円形	60×(38)	10		32	-

2. 溝状遺構

1号溝状遺構（第33図、図版4、第14表）

A・B—10グリットに位置し、重複関係はみられない。ほぼ南北の方向に長さ3.1m、幅0.5～0.7m、深さ15～50cmを測る。北端に直径35cm、深さ30cmほどにピット状に落ち込んだ部分があり、南側も深さ15cmほど深くなっている。覆土は茶褐色土が主体である。遺物は出土しておらず、時期などについては不明である。

第33図　1号溝状遺構

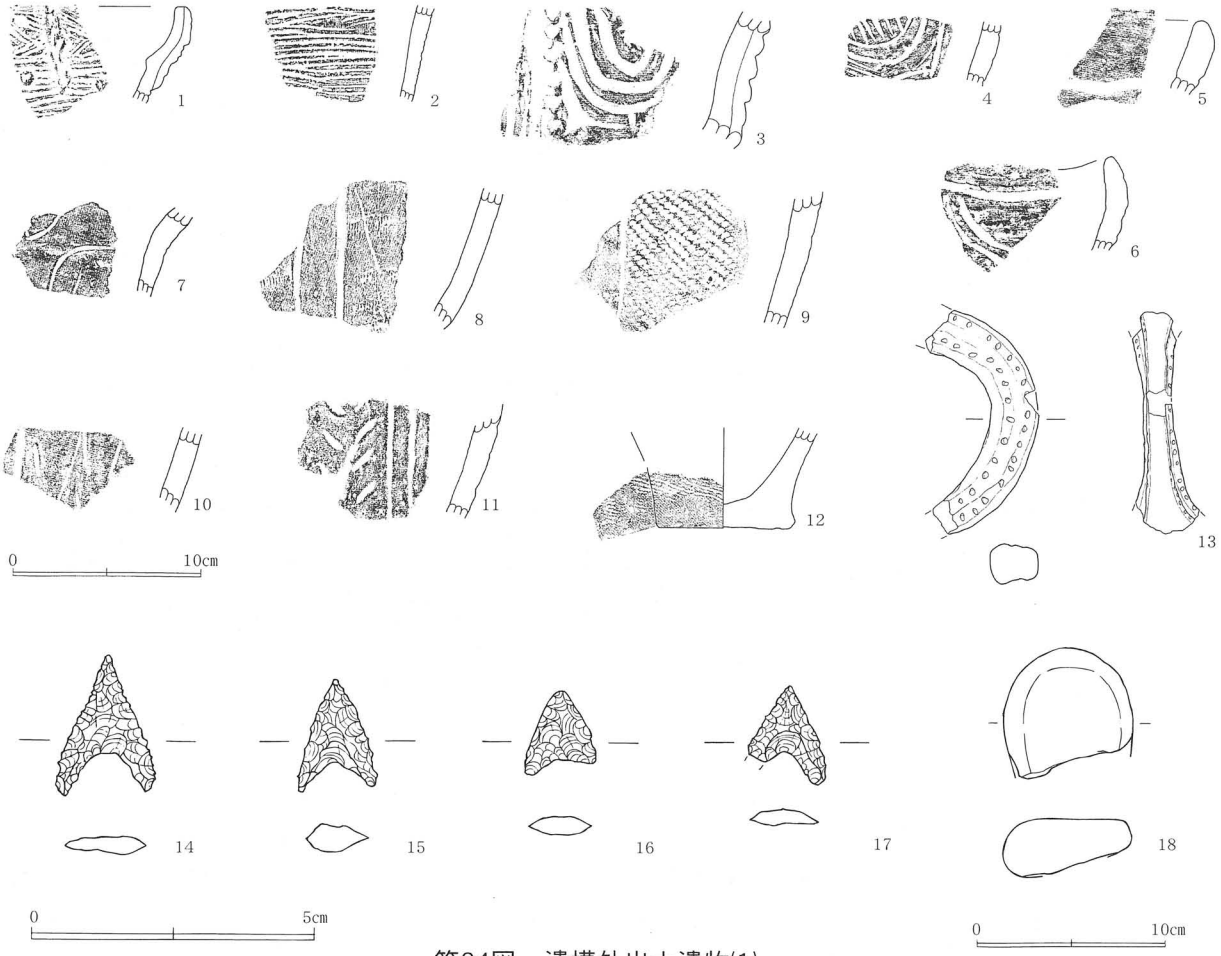
第４節　遺構外出土遺物（第 34 ～ 36 図、図版７、第 15 ～ 18 表）

本遺跡からは縄文時代の土坑１基、平安時代の住居跡が 10 軒、土坑２基、時期不明の土坑２基、溝状遺構１条などの多くの遺構が確認されており、それとともに遺構外遺物も多数出土している。

縄文時代では中期前葉の土器（１・２）、中期中葉の土器（３・４）、中期後葉の土器（５・13）などが出土している。また、黒曜石の石鏃（14 ～ 17）・磨石（18）などの石器も確認されている。

平安時代では土師器坏（19 ～ 30）・皿（31 ～ 35）・高台付坏（36・37）・柱状高台坏（38 ～ 40）・小型甕（41）・甕（42）・羽釜（43）・置きカマド（44・45）、須恵器の短頸壺（46）・壺（47）、灰釉陶器の碗（48・49）・皿（50）・甕（51）・吹子の羽口片（52）などが出土している。

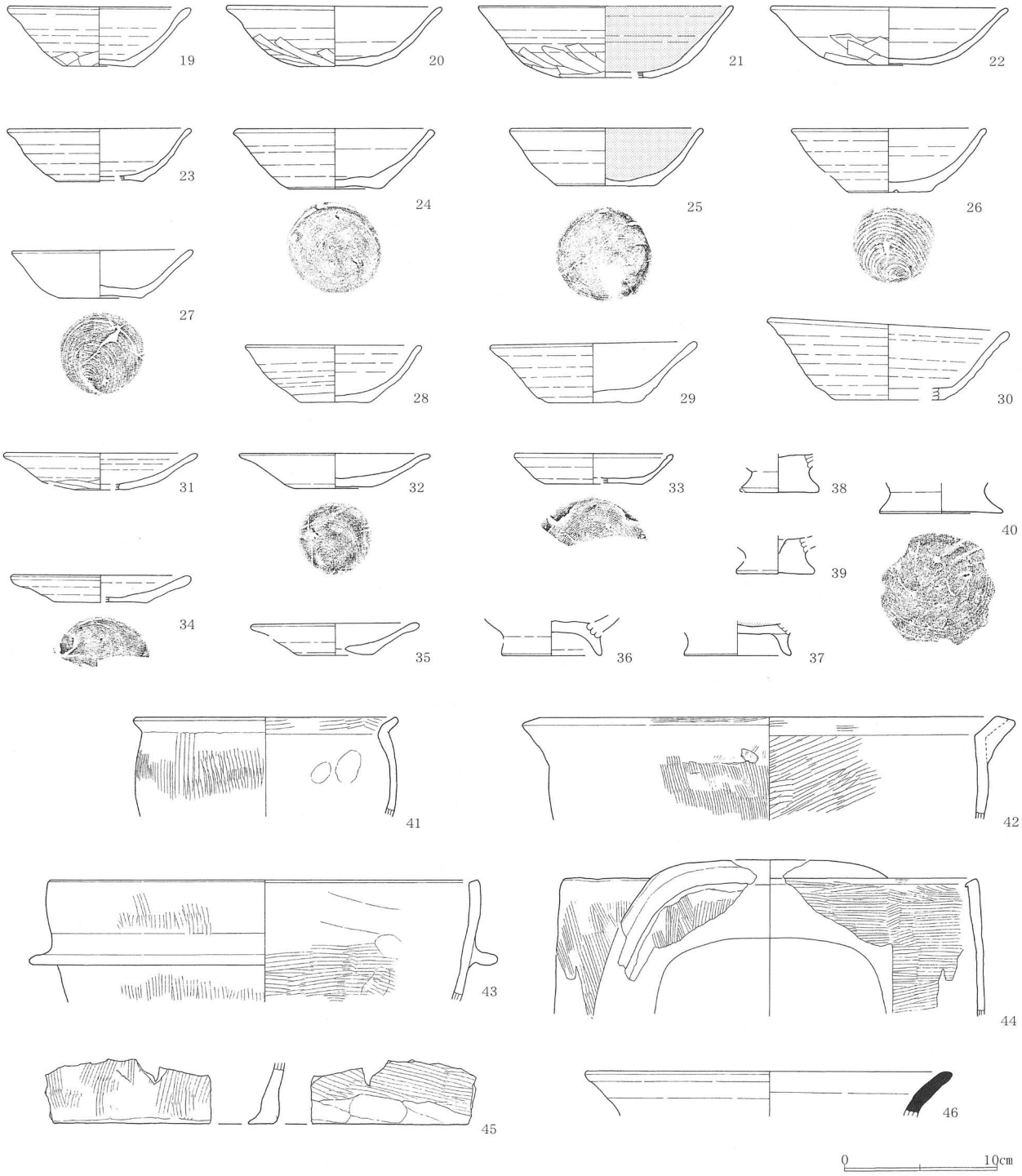
中世以降の遺物も出土しており、瓦質土器の香炉（53）・内耳土器（54）、灰釉陶器の卸目皿の破片（55）、青磁の碗の破片（56）などが出土している。また、釘などの鉄製品（57 ～ 61）も確認されている。



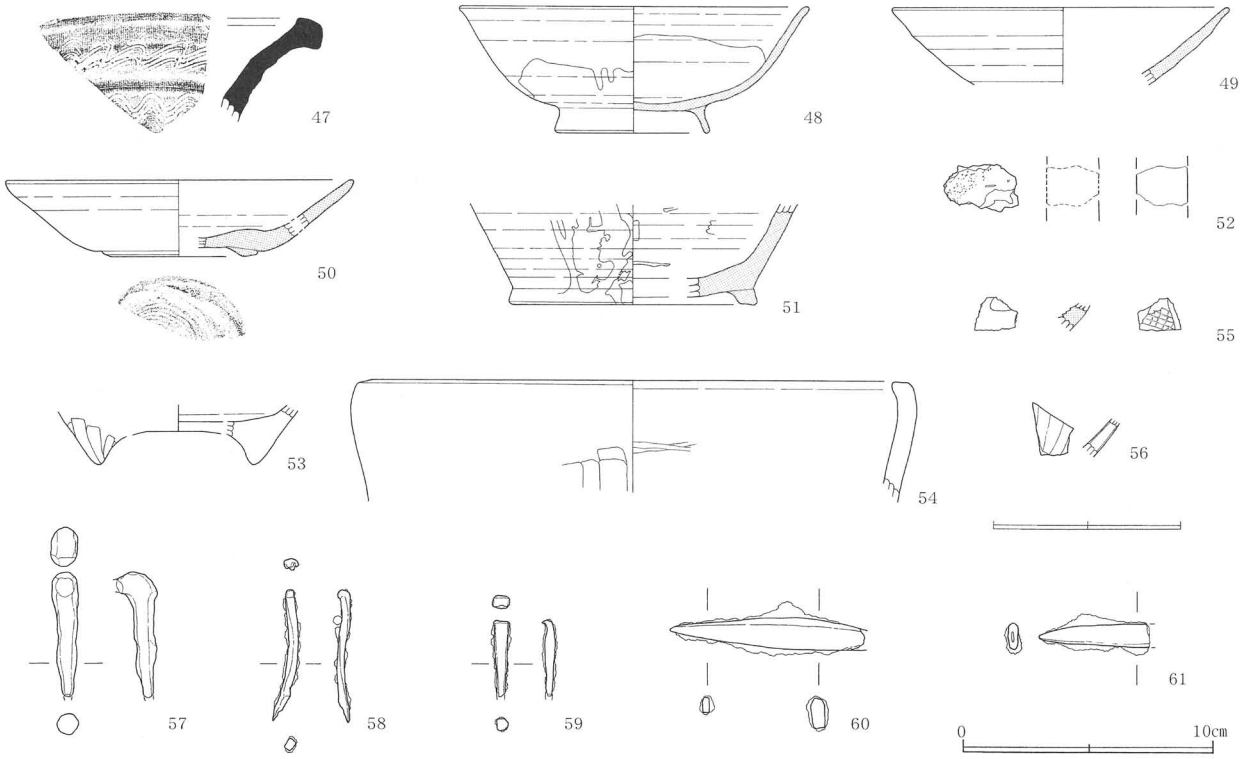
第34図　遺構外出土遺物(1)

遺構外遺物の出土状況をみると、縄文時代の遺物はⅠ区からの出土はなく、ほとんどがⅡ区から出土している。平安時代以降の遺物ではいくつかの地点から遺物がまとまって出土している状況が窺える。

１つはⅠ区東側のＢ２杭付近を中心にB1杭にひろがる部分で、特にＢ２杭付近からは土師器坏（23）や灰釉陶器の碗（48）などがみつかっている。その他に表土層内からも遺物が多く出土しており、撹乱が著しく遺構等は確認されなかった。２つはＢ４杭の北東、４・８号住居跡の北東側からＢ６杭より北、５号住居跡の北東～北西にかけて大きな撹乱があり、そこからも多数の遺物が出土している。３つは13号住居跡より東側のⅡ区の北東端部で、土師器坏（19～21）、甕類（41・42）などがみつかっており、その他にも遺物が多く出土している。



第35図　遺構外出土遺物(2)



第36図　遺構外出土遺物(3)

第15表　遺構外出土遺物観察表　(縄文時代)

遺物番号	部 位	文様・調整	胎土・焼成	色調	備　　考	挿図	図版
1	口縁部片	半裁竹管文・円形刺突文・棒状浮線文	密(黒雲母)良	にぶい橙色	前期前葉諸磯式期	34-1	-
2	胴部片	半裁竹管文	密(赤色粒子)良	暗茶褐色	前期前葉諸磯式期	34-2	-
3	胴部片	沈線文・隆帯文に刺突文	やや粗(白色粒子・雲母)良	にぶい赤褐色	中期中葉	34-3	-
4	胴部片	沈線文	密良	暗赤褐色	中期中葉	34-4	-
5	口縁部片	沈線文	やや粗 (黒雲母)　良	にぶい黄橙色	中期後葉	34-5	-
6	口縁部片	沈線文	やや粗(金雲母)　良	にぶい黄橙色	中期後葉	34-6	-
7	胴部片	沈線による文様	やや粗(白色粒子・雲母)良	にぶい赤褐色	中期後葉	34-7	-
8	胴部片	沈線文	粗(白色粒子・金雲母)良	にぶい黄白色	中期後葉	34-8	-
9	胴部片	磨消し縄文	やや粗(金雲母)　良	にぶい橙色	中期後葉	34-9	-
10	胴部片	沈線による文様(縦・ハの字状文)	やや粗良	にぶい赤褐色	中期後葉	34-10	-
11	胴部片	沈線による文様(縦・ハの字状文)	やや粗(赤色粒子・金雲母)良	にぶい黄茶褐色	中期後葉	34-11	-

遺物番号	種別 器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	文様・調整・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
12	縄文土器 深鉢	-	胴部～底部	高 (5.4) 底 7.0	胴部－縄文	粗(白色粒子・小石・雲母) 良	橙色 茶褐色		34-12 -
13	縄文土器 深鉢	-	把手のみ	-	円形刺突文	やや粗(赤・白色粒子) 良	橙色		34-13 -

遺物番号	器種	状態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考	挿図	図版
14	石鏃	一部欠損	(1.8)	1.3	0.3	0.3	黒曜石		34-14	7
15	石鏃	完形	2.5	1.8	0.3	0.2	黒曜石		34-15	7
16	石鏃	完形	2.0	1.4	0.5	0.2	黒曜石		34-16	7
17	石鏃	一部欠損	(1.2)	1.5	0.3	0.2	黒曜石		34-17	7
18	磨石	半分欠	(6.0)	6.9	[3.0]	195	閃緑岩	敲き痕あり	34-18	7

第16表　遺構外出土遺物観察表（平安時代）

遺物番号	種別 器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
19	土師器 坏	50	口縁～底部	高 3.9 口 [11.8] 底 [4.6]	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(赤・白色粒子・雲母) 良	橙色		35-19 7
20	土師器 坏	95	口縁～底部	高 4.0 口 13.8 底 4.6	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(赤色粒子多) 良	赤褐色		35-20 7
21	土師器 坏	45	口縁～底部	高 4.7 口 [16.4] 底 [6.0]	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(赤色粒子多) 良	橙色 黒色	黒色土器	35-21 -
22	土師器 坏	25	口縁～底部	高 3.8 口 [15.4] 底 [5.8]	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(赤色粒子多) 良	黄橙色	全体的に磨耗している	35-22 -
23	土師器 坏	30	口縁～底部	高 3.5 口 [11.8] 底 [5.6]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子多) 良	黄橙色		35-23 -
24	土師器 坏	75	口縁～底部	高 4.0 口 12.3 底 6.0	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤・白色粒子多) 良	赤褐色		35-24 7
25	土師器 坏	50	口縁～底部	高 3.8 口 [12.4] 底 6.2	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子微) 良	橙色 黒色	黒色土器	35-25 -
26	土師器 坏	60	口縁～底部	高 4.2 口 [12.6] 底 5.4	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子少・雲母微) 良	にぶい赤褐色		35-26 7
27	土師器 坏	100	完形	高 3.8 口 11.2 底 4.6	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(雲母多・赤色粒子微) 良	にぶい黄褐色		35-27 7
28	土師器 坏	98	ほぼ完形	高 6.8 口 18.2 底 8.1	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(白色粒子多・雲母) 良	赤褐色	全体的に磨耗している	35-28 7
29	土師器 坏	70	口縁～底部	高 3.9 口 13.0 底 5.8	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子) 良	橙色 黄橙色		35-29 7
30	土師器 坏	60	口縁～底部	高 5.0 口 15.4 底 7.4	内外面－ロクロナデ	密(赤・白色粒子少) 良	橙色		35-30 7
31	土師器 皿	50	口縁～底部	高 2.4 口 12.4 底 3.5	外面－ロクロナデ→ヘラケズリ 内面－ロクロナデ 底部－ヘラケズリ	密(赤・白色粒子多) 良	にぶい橙色		35-31 7
32	土師器 皿	60	口縁～底部	高 2.0 口 12.3 底 5.2	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子・雲母) 良	黄橙色		35-32 -
33	土師器 皿	15	口縁～底部	高 2.0 口 [10.0] 底 [6.2]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(雲母・赤色粒子微) 良	明赤褐色		35-33 -
34	土師器 皿	45	口縁～底部	高 1.8 口 [11.6] 底 [6.2]	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	密(赤色粒子・雲母微) 良	黄褐色		35-34 -

35	土師器 皿	70	口縁～ 底部	高　2.1 口［10.6］ 底　5.0	内外面－ロクロナデ	密(赤色粒子) 良	黄白色	底部中央穿孔あり	35-35 －
36	土師器 高台付坏	－	高台部 のみ	高（2.3） 底［6.4］	内外面－ロクロナデ	密(赤・白色粒子微)　良	黄橙色	貼り付け高台	35-36 －
37	土師器 高台付坏	－	高台部 のみ	高（2.2） 底［7.0］	内外面－ロクロナデ	密(雲母・赤色粒子微)　良	橙色 黒色	黒色土器 貼り付け高台	35-37 －
38	土師器 柱状 高台坏	－	高台部 のみ	高（2.3） 底［5.2］	内外面－ロクロナデ	密(白・赤色粒子)　良	橙色		35-38 －
39	土師器 柱状 高台坏	－	高台部 のみ	高（2.5） 底［4.8］	内外面－ロクロナデ	密(白色粒子多・赤色粒子) 良	黄橙色	坏部中央に穴あり 底部の糸切り痕不明瞭	35-39 －
40	土師器 柱状 高台坏	－	高台部 のみ	高（2.0） 底［8.0］	内外面－ロクロナデ 底部－回転糸切り	やや粗(白色粒子多)　良	赤褐色	全体にスス付着	35-40 7
41	土師器 小型甕	－	口縁部 片	高（6.5） 口［17.0］	外面－ハケ 内面－ハケ・指押さえ	やや粗(白色粒子・雲母多) 良	暗茶褐色		35-41 －
42	土師器 甕	－	口縁部 片	高（6.7） 口［30.0］	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(白色粒子・雲母多) 良	暗茶褐色		35-42 －
43	土師器 羽釜	－	口縁部 片	高（8.0） 口［28.0］	外面－ハケ・ナデ 内面－ハケ・ナデ・指押さえ	密(白色粒子多・赤色粒子微)　良	暗茶褐色		35-43 －
44	土師器 置き カマド	－	口縁部 片	高（10.0） 口［26.8］	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(白色粒子・金雲母多）　良	暗褐色		35-44 7
45	土師器 置き カマド	－	底部片	－	内外面－ハケ・ナデ	やや粗(白色粒子・金雲母微)　良	赤褐色		35-45 7
46	須恵器 短頸壺	－	口縁部 片	高（3.0） 口［23.6］	内外面－ロクロ整形	緻密 良	青灰色		35-46 －
47	須恵器 壺	－	口縁部 片	－	外面－ロクロ整形、櫛描波状文 内面－ロクロ整形	緻密 良	灰白色		36-47 －
48	灰釉陶器 碗	70	口縁～ 底部	高　6.8 口　18.2 底　8.0	内外面－ロクロ整形	緻密 良	灰白色	内外面に釉付着	36-48 7
49	灰釉陶器 碗	－	口縁部 片	高（4.2） 口［18.0］	内外面－ロクロ整形	緻密 良	緑灰白色	内外面に釉付着	36-49 －
50	灰釉陶器 皿	20	口縁～ 底部	高　4.1 口［18.4］ 底［8.2］	内外面－ロクロ整形	やや粗 良	灰白色	貼り付け高台	36-50 －
51	灰釉陶器 甕	－	底部片	高（5.4） 底［13.0］	内外面－ロクロ整形	緻密 良	青灰色	内外面に釉付着 貼り付け高台	36-51 －
52	土製品 吹子	－	羽口片	－	外面が黒く変色し、一部焼けて気泡ができた跡あり	密(白・赤色粒子多)　良	黒色 橙色		36-52 －

第17表　遺構外出土遺物観察表（中世）

遺物番号	種別 器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
53	瓦質土器 香炉	－	底部片	高（1.5） 足［8.4］	外面－ロクロナデ・ヘラケズリ 内面－ロクロナデ	密 良	黒灰色 黒色	三足香炉と思われる	36-53 7
54	内耳土器	－	口縁部 片	高（6.0） 口［29.2］	外面－ヘラナデ 内面－ナデ	密(赤・白色粒子)　良	黒褐色		36-54 7
55	灰釉陶器 卸目皿	－	胴部片	－	外面－ロクロ整形 内面－卸目	緻密 良	灰白色	中世（14～15世紀代）	36-55 7
56	青磁 碗	－	胴部片	－	鎬ぎ蓮弁	緻密 良	青緑色	中世（13～14世紀代）	36-56 7

第18表　遺構外出土遺物観察表（鉄製品）

遺物番号	種　類	出土位置	状　態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　考	挿図図版
57	釘	一括	一部欠	(5.0)	1.0	0.8	6		36-57 -
58	釘	一括	ほぼ完形	5.3	0.5	0.5	4	先端部が少し捻れている	36-58 -
59	釘	一括	一部欠	(3.0)	0.6	0.5	2		36-59 -
60	棒状鉄製品	一括	ほぼ完形	(7.7)	1.3	0.5	15		36-60 -
61	棒状鉄製品	一括	一部欠	(4.5)	1.0	0.4	8		36-61 -

第Ⅴ章　まとめ

今回は町道57号線の建設工事にともない約600㎡を対象に調査を行った。調査地域はもともと傾斜面上の地形にあり、畑をつくる際に、傾斜面上部の土を削って下に積むことにより各段の平坦面をつくって、ヒナ段上に整地していた。そのため、耕作土直下に遺構の確認面をもつものがほとんどで、遺物は出土しているが、遺構の確認が難しいものが多いなど、遺存状態は必ずしも良好な状態ではなかった。

そのような中、縄文時代の土坑1基、平安時代の住居跡10軒、土坑2基、時期不明の土坑2基、溝状遺構1条などの遺構が検出された。遺物では縄文土器・土師器などの土器類をはじめ、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、中世の瓦質土器（香炉・内耳鍋）、灰釉陶器片、青磁片、石器（磨石・砥石・石鏃）、鉄製品関係の遺物（釘・鉄滓・吹子の羽口）などが出土している。

遺構の時期　縄文時代では土坑が1基確認され、そこから遺物が数点出土し、遺構外からも前期中葉・中期中葉～後葉の土器が十数点出土している。また、石鏃などの石器類も確認されている。

平安時代では住居跡10軒（2・3・4・5・6・7・8・10・11・13号住居跡）、詳細不明の平安時代のものと思われる土坑2基（1・4号土坑）が確認されている。遺構の所属時期は以下のとおりである。

10世紀前半　・・・10号住居跡、11号住居跡
10世紀中頃　・・・2号住居跡
10世紀後半（第3四半世紀）　・・・3号住居跡、4号住居跡、5号住居跡、13号住居跡
10世紀後半（第4四半世紀）　・・・6号住居跡、8号住居跡
10世紀末～11世紀初　・・・7号住居跡

このうち、2号住居跡は10世紀後半代の遺物も出土しているが、全体的にそれより古い様相を呈している遺物がみられる事と遺構の切り合い関係などから時期を10世紀中頃とした。

3号住居跡は遺物の数も少なく遺物では細分できなかったが、一部を10世紀第4四半世紀の6号住居跡に切られ、10世紀中頃の2号住居跡を切ってつくられていたため、10世紀第3四半世紀代の遺構とした。

13号住居跡は撹乱が著しく、遺構を確認する際もカマドの焼土らしき跡しか確認できず、床面・立ち上がりともに不明な状態であったが、時期的にまとまった遺物が多数出土したことから、遺物の状態から10世紀後半第3四半世紀の住居跡とした。

このように今回発掘された地点では10世紀前半に集落がつくられ、その後途切れることなく10世紀末～11世紀初まで継続する状態がみられる比較的短い期間の集落であった。

分布をみると10世紀前半代の住居跡はⅡ区の西側に位置しており、それより東側からⅠ区にかけては確認されていないことから、西側の標高が低い部分に分布している可能性が高い。その後10世紀中頃以降の住居跡は13号住居跡から東側にあたる主にⅠ区の西側から多数確認されているため、Ⅰ区を中心としたそれより東側の標高の高い部分に多く分布している可能性が考えられる。

中でもＩ区西側では住居跡が重なり合って確認され、時期的に10世紀中頃～11世紀初までの間にさらに住居跡が四時期に細分されるといった状態がみられるなど、短期間に高密度の分布が確認できる。

出土遺物について　土器は主に坏類の中に磨耗しているものも多く、口縁部が歪んでいるために左右に高低差がみられるものや、器壁が同時期のものに比べて極めて厚いもの、口縁部が楕円形に拉げているものなどが多くみられ、町内の他の遺跡に比べて土器のつくり方としては粗雑な品を用いている傾向がみられる。灰釉・緑釉陶器は十数点出土しているが、中でも２号住居跡から出土した段皿や６号住居跡の耳皿など質の良い資料が出土している。置きカマドの破片は５点ほど出土し、主に10世紀代を中心としたものだが、町内の遺跡と比べて比較的よく出土している。灯明皿として使われた坏や底に墨がこびり付いた状態の墨溜め用に用いられた坏などが数点出土したが、今回の調査では墨書土器は全く出土しておらず、それらとの関係には不明な点がある。中世の遺物が数点出土しており、中には13～14世紀代にあたる青磁の碗の破片や、他に14～15世紀代と思われる灰釉陶器の卸目皿の破片なども出土している。同時期の遺構は確認されていないが、平安時代以降にもこの周辺に人々が生活していた事が窺われ、今後それらの生活跡が確認される可能性がある。

条里制について　町史によると『米倉字大仏塚の浅川左岸に「屯田跡」、米倉字金山に「屯倉跡」とよばれる地域がある。屯田とは大化の改新以前の皇室直轄領で、この皇室直轄領には田会の管理のもとに農民に耕作させる直接経営のものと、国造らの支配の一部にあてるものとがあったが、屯田は前者をさすものといわれ、特に地域的には畿内及びその周辺に限られるといわれてきた……律令制で全国に施工された条里制や戸籍がまず屯倉内部で行われ、朝廷の経済力を増大させた』との記述がみられ、本遺跡含めた周辺の浅川左岸において古い時期から条里制遺構と何らかの関係があったものと思われる。分布調査でも本遺跡付近に米倉Ｃ条里制遺構として確認されている条里制地割があるが、条里制遺構そのものや、時期的な問題などに不明な点が多く、今のところ具体的な資料が確認されていないなど詳細は不明である。

本町での平安時代の遺跡分布は一般的に後半期になるとその数を増やしつつ、盆地全域にわたって遺跡が拡散しながら山間部にまで広く分布するようになる。本遺跡もこれまであまり集落が確認されていない浅川左岸にあるまさにその時期に広がった集落の一つであると思われる。また、条里制遺構とも隣接して存在していたと考えると、浅川左岸地域は生産基盤である水田跡の拡大に伴いその周辺に平安時代の集落がつくられていったのではないかと思われる。

現段階では調査成果が少ないため、あくまでも現状での情報をもとにまとめたに過ぎない。今後周辺の調査が進展すれば、各時代における集落の構造や分布状態、その時期的な消長関係について徐々に明らかになっていくものと思われる。

参考文献

八代町　1975『八代町誌』（上巻）

八代町教育委員会　1984『五里原遺跡発掘調査概要』

1985『上の平遺跡』

1987『三光神遺跡』

1990『遺跡詳細分布調査報告書』・『堀川遺跡』

1996『堀ノ内遺跡』

1997『平成８年度町内遺跡発掘調査報告書』

2003『金地蔵遺跡』・『四反田遺跡・東小山Ｂ遺跡・東小山Ｃ遺跡』

2004『下長崎遺跡』・『五里原遺跡』

山梨県教育委員会　1989『下長崎遺跡・両の木神社遺跡』

1991『山梨県史』資料編１原始・古代１考古（遺跡編）

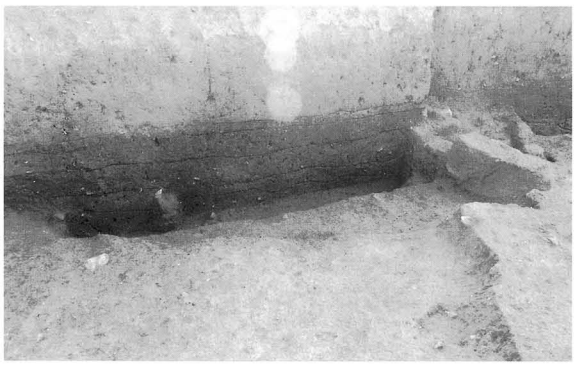
『山梨県史』資料編２原始・古代２考古（遺構・遺物編）

図　　版

図版 1

1.　遺跡全景（南より）

2.　調査区全景



3.　3 号住居跡

4.　4 号住居跡

図版 2

1.　5 号住居跡

2.　5 号住居跡カマド(1)

3.　5 号住居跡カマド(2)

4.　6 号住居跡

5.　6 号住居跡カマド

6.　7 号住居跡

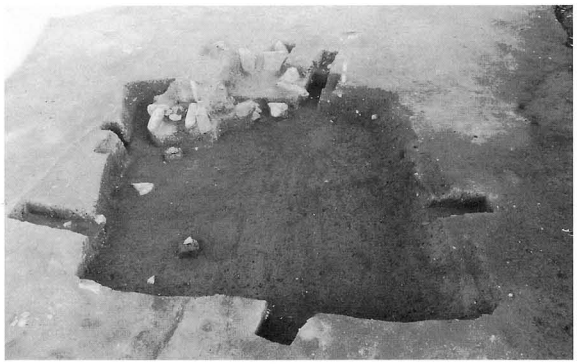
7.　7 号住居跡カマド

8.　7 号住居跡カマド断面

図版 3

1.　7 号住居跡遺物出土状態(1)

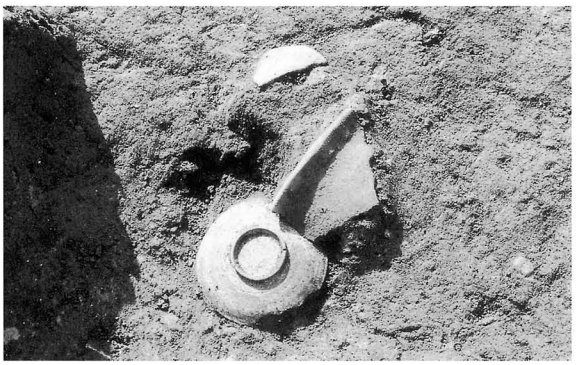
2.　7 号住居跡遺物出土状態(2)



3.　8 号住居跡

4.　8 号住居跡カマド

5.　10 号住居跡

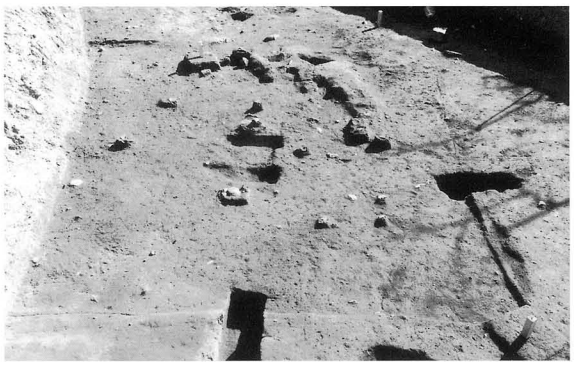


6.　10 号住居跡遺物出土状態

7.　11 号住居跡

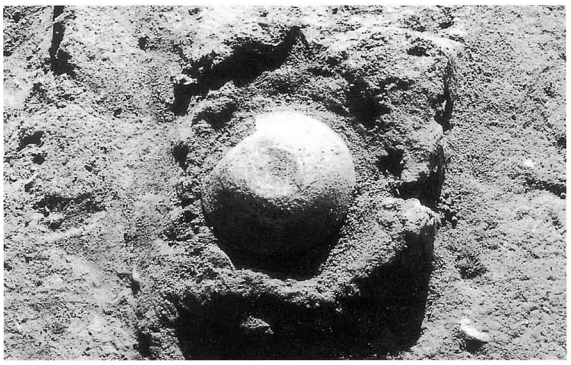
8.　11 号住居跡カマド

図版 4

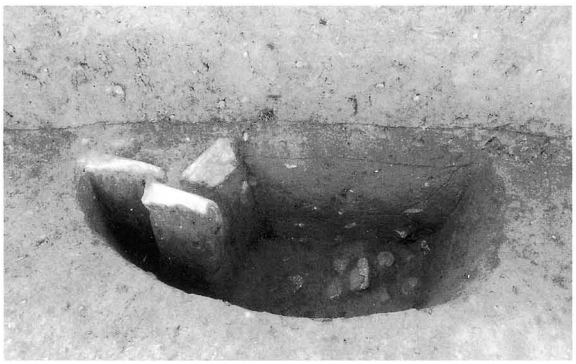


1.　13 号住居跡

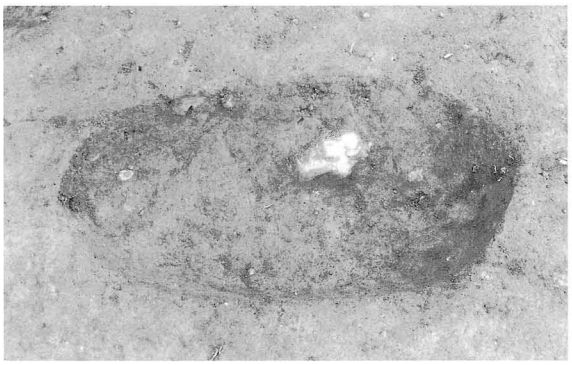
2.　13 号住居跡カマド



3.　13 号住居跡遺物出土状態



4.　1 号土坑



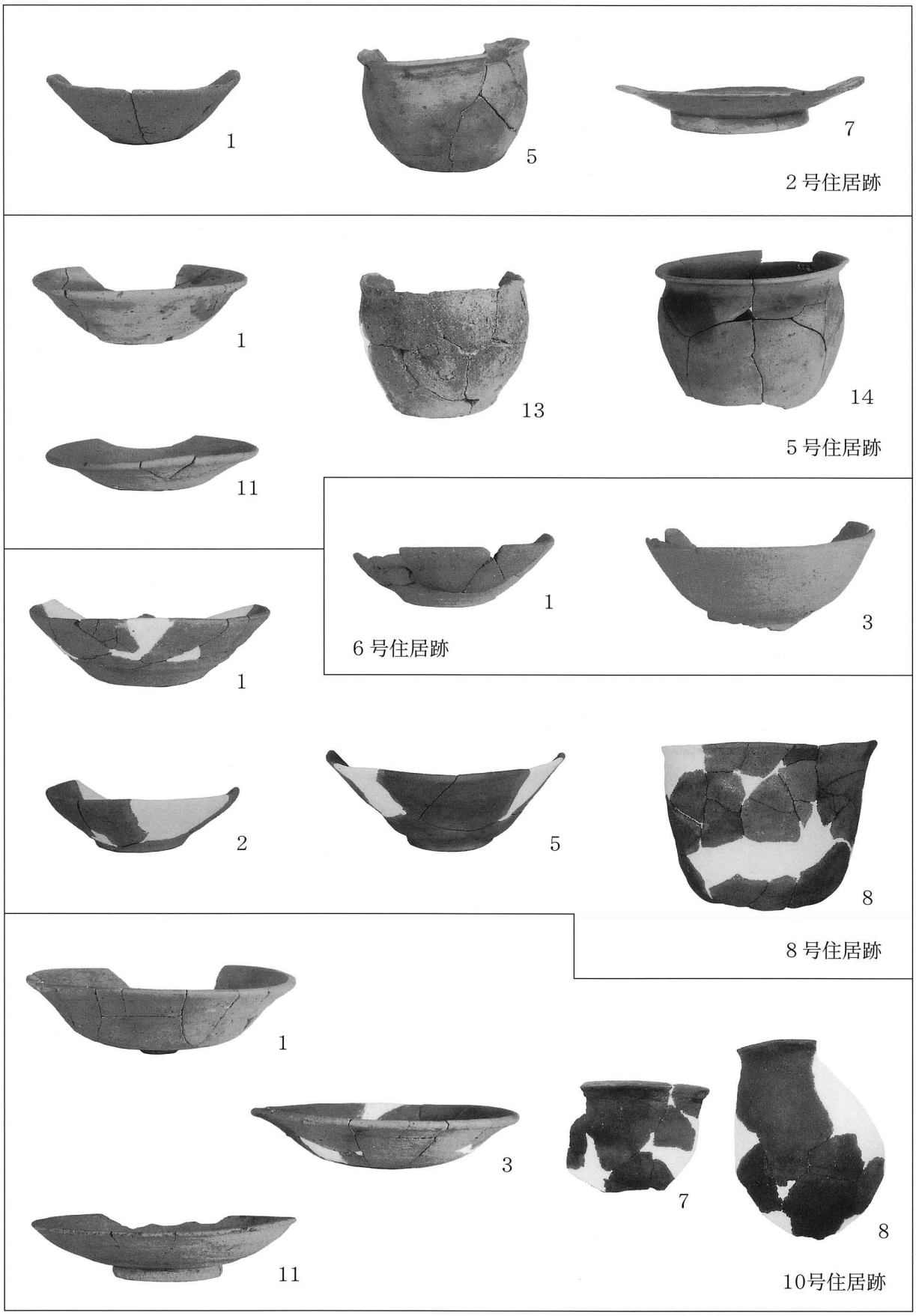
5.　3 号土坑

6.　4 号土坑

7.　1 号溝状遺構

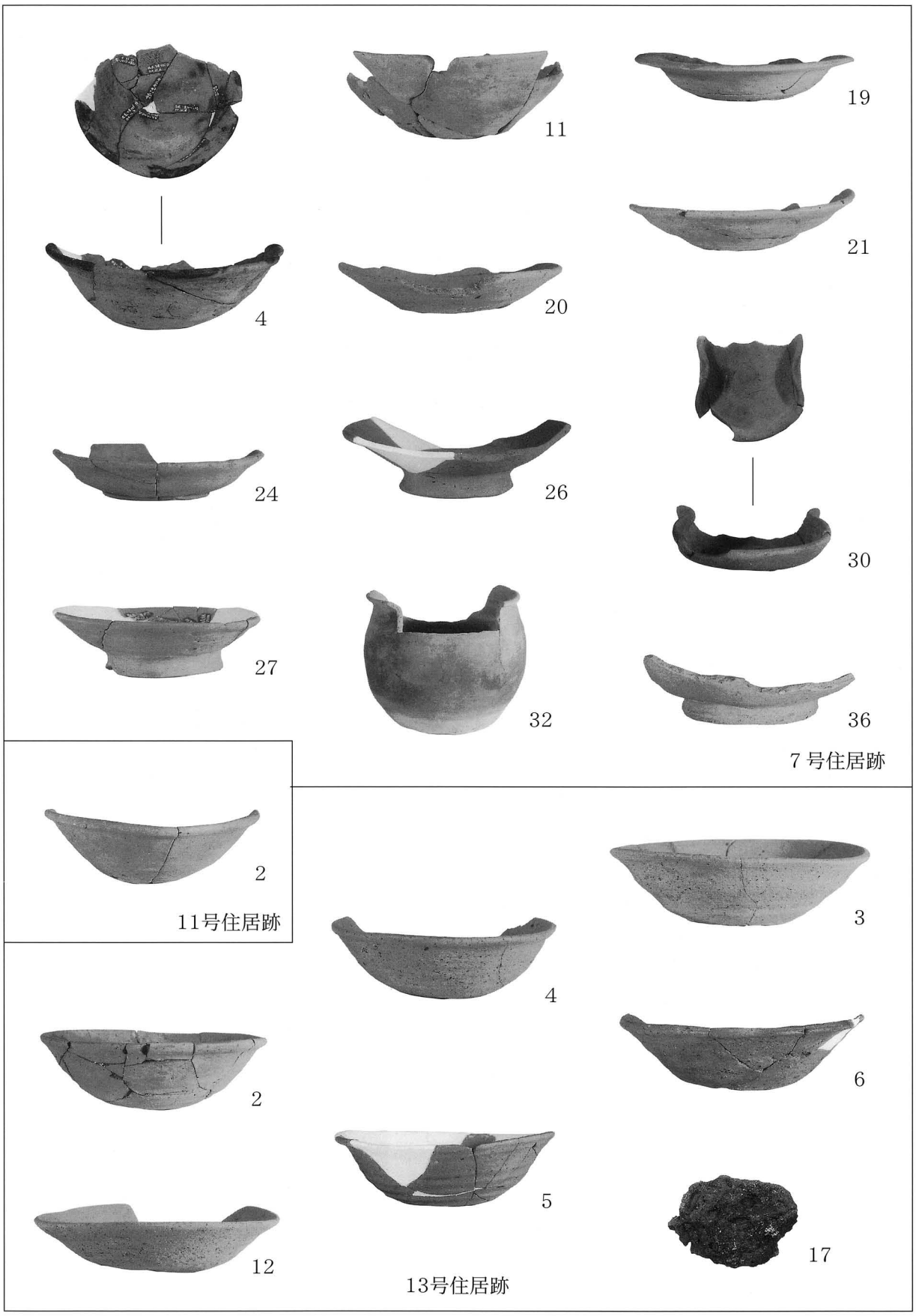
8.　調査風景

図版 5



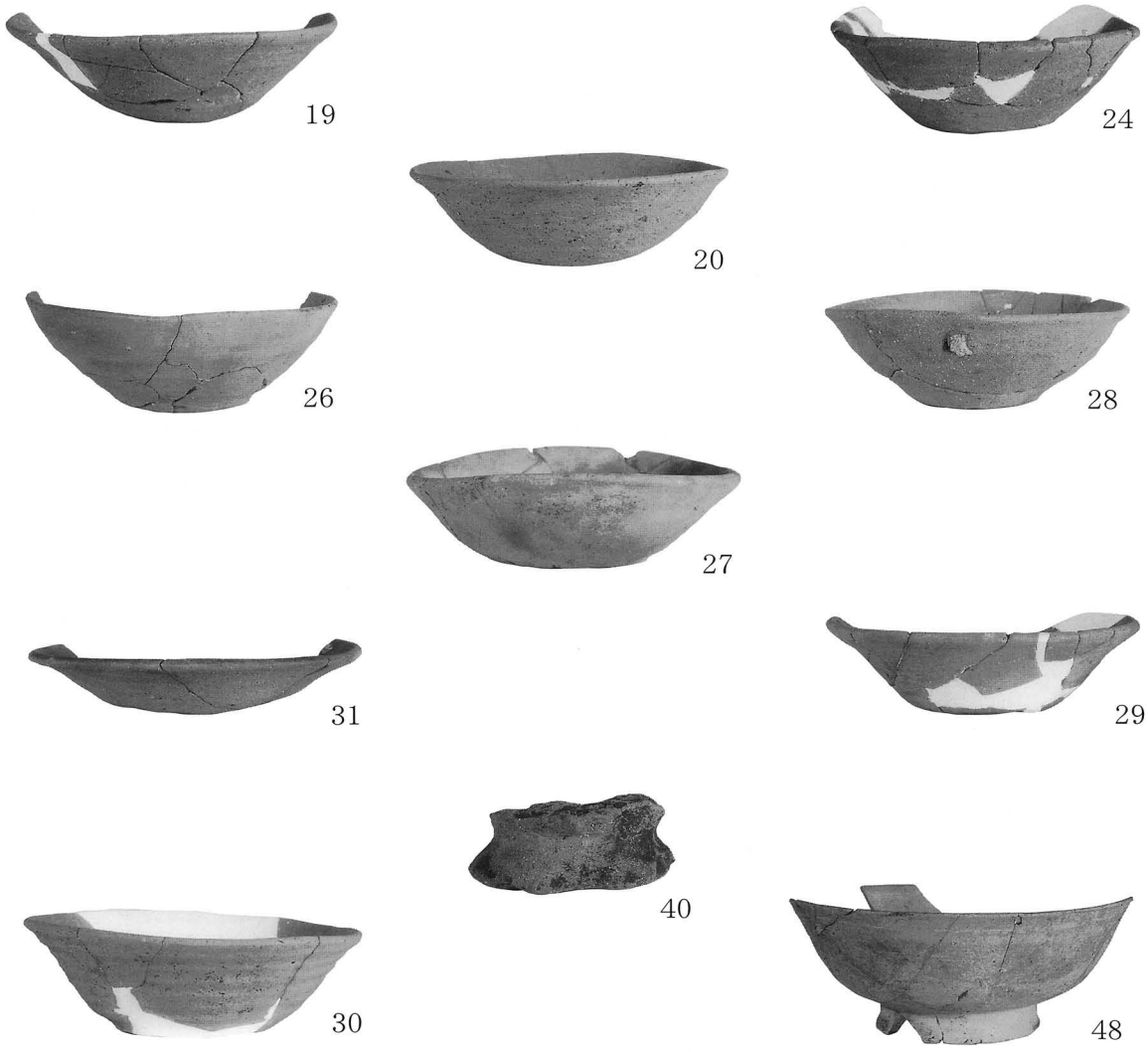
平安時代の遺物(1)

図版 6

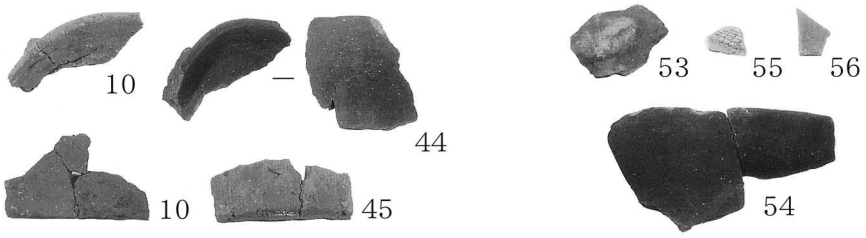


平安時代の遺物(2)

図版７



遺構外出土遺物

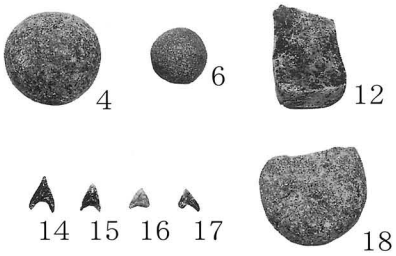


〈中世の遺物〉

53～56.
遺構外出土

〈置きカマド〉

10(上). ８号住居跡
10(下). 10号住居跡
44. 遺構外出土
45. 遺構外出土



〈石器〉

4. ４号住居跡
6. ６号住居跡
10. 10号住居跡
14～18. 遺構外出土

報告書抄録

ふりがな	よながいせき
書名	夜長遺跡
副書名	笛吹市道八代57号線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	小坂規恵
編集機関	笛吹市教育委員会
所在地	〒406-8555　山梨県笛吹市八代町南527　TEL 055-（265）-4852
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
よながいせき 夜長遺跡	やまなしけんふえふきし 山梨県笛吹市 やつしろちょうよねぐら 八代町米倉 あざだいぶつづか　ほか 字大仏塚438－1他			35°36’18”	138°38’22”	20001004 ～20001227	約600㎡	町道57号線建設工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
夜長遺跡	集落跡	縄文時代	土坑	土器・石器	
		平安時代	竪穴住居跡	土師器・須恵器	
			土坑	灰釉陶器・緑釉陶器	
				土製品・石器	
		中世		瓦質土器	
				灰釉陶器・青磁	
		時期不明	土坑	鉄製品	
			溝状遺構		

笛吹市文化財調査報告書　第１集

夜　長　遺　跡

発行日　平成17年3月31日
発　行　笛吹市教育委員会
印　刷　稲　村　印　刷　社
山梨県東八代郡石和町下平井1370

Fuefuki City Cultural Preservation Series Vol.1

The Report of Archaeological Research of YONAGA Site

Archaeological Rescue Survey before the Construction of City Highway "Yatsushiro No. 57"

2005

Fuefuki City Board of Education